

其いさを
敵を防ぎたる
功や身代りし
たるを云ふ。

◎時序

四つの緒琴
琵琶を云ふ。

大和心
ひまこたまし

國音
國にての字の
發音。

詞人
詩賦にたづさ
はる人。

滿城
全市街の義。

◎時序

(春) ○吉野 紀行

百五十

の矢疵十餘ヶ所、薄手の疵は數知れず。今は是迄とや思ひ
けん、とある竹叢に走せ入りて、腹かき切りてぞ失せにけ
る。此隙に宮は虎口を遁れ給ひ、高野山に落ち伸び給ひし
は、村上父子が美吉野の、花と散りにし其いさを、立田の
秋のもみぢ葉の、あかき心によるごかや。

と、針はハタと止りて曲終りしかど、鳴りもやまぬは例の拍
手なり。あはれ一個の器、冴わたる腕に弾きならず。四つの
緒琴の其儘を、一上一下の聲に和し、短調急調とりくく、
聞くも悲しく勇ましく、大和心の花と散る。忠臣父子の夢の
跡、處も處時も時、吉野の里に此曲を聴くに遇ふ。何等の悲
壯ぞや。仰げば空に月曇り、飛花一片二片心ありげに座にそ

そぎぬ。

墨田十里の春

墨田とは、隅田と國音相通するより、詞人が選びし雅なる字
面に過ぎず。そも墨田とは、隅田村附近の稱にして、下流吾
妻橋以南は大川との名あり。此川の東岸二里の長堤を向島と
呼び、又なき櫻の名所、詞人は亦夢香洲との字面を用ふ。上
流は秩父郡にて中津川、大里郡にては荒川と呼ばる、なり。
櫻の移植は遠く享保年間の事に屬し、東京の繁華と共に其名
天下に著れ、花候に至れば滿城の士女相争うて來り、衣香扇
影、繁華いはんやうなし。殊に、幾多の神祠寺院と古蹟と散

(春) ○墨田十里の春

百五十一

行樂の地
遊びたのしむ
地。

吊し
ぶらさぐるこ
こ。

夕だてや
夕立ちせよ
の義。

◎時序

(春) ○墨田十里の春

百五十二

在し、遊人をして長き春の日をして、尙短き想ひせしむる行樂の地、行くさ來るさの浮かれ男女、向鉢卷に酒樽肩にする若者や、片はだ脱ぎて跳ね狂ふ中年の女も珍らしからず、是等を俗と嘲らば、黒帽洋服の扮装紳士が空瓢箪を打ちふり行く、茶人めきたる老人がビール壺を手拭にて吊し歩く、何ぞ評して宜しかるべき。はた年々に金にまかして別荘建て、名所を荒す人々は、花の爲には仇と呼ぶべき乎。吾は萬人の遊ぶ所、萬人の興する所、一齊平等に風流と謂はんとす。今日しも花曇して天低く、春に酔ひ人に酔ひ、そこはかどなく友に伴はれて、小梅には三園神社を訪ひ、名のみ聞きし彼の「夕だてや田をみめぐりの神ならば」との其角が句碑をも

摩挲
手でなぐるこ
こ。

叩く口
悪口するこの
義。

遅々
春の日の暮れ
んとして遅き
形容。

◎時序

(春) ○墨田十里の春

百五十三

杖植て、讀みぬ。次には牛の御前、相接したる長命寺をも叩き、境内の芭蕉堂址を吊ひ、舊となく新となく、建ち並びし詞人の碑をも手づから摩挲しぬ。寺門には例の名物櫻餅を商ふ家多く、國の土産話の種にと味へば、雨風雨天秤ぞと友ごもの悪口、また罪なし。寺を出で、堤に上れば、北に言問の岡あり、言問園子を嚮ぐ、茶亭殊に名あり。君よ、一つ如何にぞ、友が軽く叩く口、是も罪なき言なれども、聊か憎し。川に鷗の游泳し、浮世の外に浮沈するがあり、世に謂ふ都鳥とは是。業平朝臣の「いざ言問はん」の歌より、かゝる名を負はせしものぞか。遅々たる春日さすがに暮れたそく。それより足にまかせて花

◎時序

旗亭
料理屋。時に
よりては旅舎
にも云ふ。

素朴
おこらぬこと
しつそ。

雅俗
雅人も俗人も
この義。

(春) ○墨田十里の春

見つ、秋葉神社にも詣で、近き旗亭に一酌し、序でなれば
蓮華寺をも尋ね、百花園にも入りたり、園は俗に向島の花
屋敷と稱し、文化の頃、菊塙といふ風流人あり、此園を開き
て四季の花弁を栽培し、悠悠自ら閑日月を楽しめる餘、當代
の文人墨客と交を結び、其紹介を以て名を都下に馳するに至
りき。その頃は、時代が時代にしあれば、専ら素朴を主と
し、「茶茶きこしめせ、梅干も候ぞ」と書せる看板を掲げ、
僅かに風流人の來觀を引くに過ぎざりしに、今は向島に遊ぶ
もの、雅俗の別なく此園に歩を枉ぐるが常となり、終に墨田
の一名所となり、誰れ知らぬもの無きに至りぬ。園には櫻の
外、梅あり菊あり楓あり、殊に秋の七草に名を得、所謂花屋

◎時序

合作
二人以上の人
が共に著作す
ること。又、
その物。

全うせり
たもてりとの
義。

(春) ○墨田十里の春

敷の面目を全うせり。尙、百花園より北して十餘町、木母寺
に梅若塚をも、夕陽の影冷かなる底に吊ひき。梅若は、寛和
年間吉田少將惟貞の子、人買の爲にかごはかされ、茲に來り
て死す、此塚は即ち其梅若丸の屍を葬れる處。事蹟は、自笑
と其碩との合作なる、梅若丸一代記に精し。其序に曰ふ、曇
りなき月すみだ川の浪靜かに、吹く風柳の枝を鳴さず、人の
心も和颯利と、春めく花にやごりの鶯、笛音もたもしろき三
味線の色香を、のこす梅若の昔語を聞傳へて、今の世の諷物
となしぬ。誠に見ぬ世の有様を、いざこととはん都鳥、妻戀
の口笛にまかせて、ありやなしやの世がたりを、集め五の巻
々に載せて、たのしき春の慰ものとなし侍りぬ。享保十九寅

◎時序

一簇
ひさかたまり
ひさむら。

微絃低唱
つめびきして
小聲で歌ふこ
ご。

同日云云
いっしょに評
する事は出来
ぬさなり。

(春) ○墨田十里の春

百五十六

舟に棹すは流石にゆかし、岸を遠く離れて、一簇の霞と見渡すもよく、或は近づきて花の下に、纜を繋ぐもよし。今日しも數多の遊山船、流しつ、沂らせつ、思ひくの興、珠簾をなまぬるき川風に吹かせ、紅提灯の影を油の如き碧波にうつすなご、舟の人より岡目はちもくの例、吾が見し興を深からん妓を載せての微絃低唱、陸の花見とは又同日に論すべくもあらざりき。

十里の長堤は、はや花はの暗く。うす絹をかけたらんが如き景色、何處よりか緩う流る、疎鐘は、暮を報じて水を渡り、吹くとしもなき風に散る花の一片二片、いと憐れ深き眺めぞ

夜花
夜に入りての
花。

筆驅りて
筆使うて。

風致
おしむき。

四望平衍
四方の眺めが
平かにして廣
き。

◎時序

や。今宵しも月ならば、夜花を賞せんと思ひしも、世の中は何事も我儘ならぬ闇、雪よりも白き花に行手照らせ、電燈まばゆき七時頃、東京は神田なる友が宿りに歸り來ぬ。飯すみて後、旅硯を懐に探り、前後次第もなくさらりと、筆驅りて物せるが是。その用意なき處、風流と云は、云はるべくや、と斯く。

小金井の櫻花

等しく是れ櫻花なり、其水無きと之れ有ると、風致固より同日に語るべからず。小金井の地たる、武藏野の中に位し、四望平衍、茫々たる其末は遠く天に接し、西北に富士、秩父の

(春) ○小金井の櫻花

百五十七

◎時序

風光云云
景色は早くよ
り世の常でな
し。

遠く云云
花を眺めし形
容。

春の云云
櫻の枯れて春
の荒れたるを
云ふ。

(春)

○小金井の櫻花

百五十八

連山を望み、風光夙に凡ならず。剩さへ多摩川上水の兩岸、
數百株の櫻樹列植し、春風駘蕩の候に至れば、雪と亂れ雲と
棚引く花、見渡すかざりはても無く、遠く望めば糝糊、近く
來れば玲瓏、流る、水芳ばしく、吹く風も亦白し。而も墨田
に比すれば靜かに、眞の花見の趣は彼に在らずして、此處に
在るべくや。

年毎に人を引く櫻は、承應年間、徳川氏渠を穿ちて多摩川の
水を東都にひくの後、郡官川崎定孝、大和の吉野山、常陸の
櫻川の二ヶ所より、良種を撰びて移植したるが最初にして、
のち半ば枯朽に屬したりしを、田無村の下田某、春の寂びれ
しを嘆じ、沿村の民に議りて更に數千株を増植せしは、遠く

士女

男や女や云
ふこと。

概ね
たいがい。

逍遙

そゆるあるき
さまよふこと

分韻云云

韻を分ちて其
詩の出來ぬ内
に。

◎時序

(春)

○小金井の櫻花

百五十九

もあらぬ嘉永年間の事とかや。今し春毎に美しく咲き出で、
幾百の士女をして行樂に落日を忘れしむるは、前後兩度に栽
ゑられし櫻なり。花信は、墨田のより遅きこと四五日、年の
寒暖により、多少の異同ありと雖も、概ね大差あるなしと聞
きしに、既に墨田の遊を終へし今日、友は小金井に遊び、一
日を花下に逍遙し、心ゆくまで歌はずやと誘ひぬ。

秋に至りて春よりの怠り、日説の白きに悔ゆること年々の事
ながら、友の厚意と久しく夢馳せし小金井の花に背き難く、
一も二もなく頭を縦にふり、さらばと都を出で、紅塵とほく
甲武鐵道列車に暫し身を預け、分韻の詩いまだ成らざるに、
早くも境停車場に達したり。下車の人々、多くは小金井に志

心に云云
想はるゝこの
義。

◎時序

點綴
散在するさま
を云ふ。

彌漫一色
花の一面にひ
るごりて只ひ
色に白きこ
と。

(春)

○小金井の櫻花

百六十

す雅俗なるべきも、數ふるばかりの人数、先づ静けき花の眺め、心に描かれて嬉し。
友は今日にて二度目なりとて、案内知りたる路を北へ〜と歩し、彼の霞か、れる峰は何、鶏犬相呼び相應じ、農家の點綴する村は何、志す小金井の里は既に近し、彌漫一色、白雲の棚引く如きは皆花なりとぞ、空高う鳴く雲雀の聲を戴きなから、半里の行程を畫中にすぎ、春の水緩う流る、多摩川上水の岸に立つ身とはなりぬ。
花は今し眞盛り、微風梢をわたれど雪崩れず、水には細波起ちて春の影ゆらぎ、仰ぎつ俯しつ小詩吟じつ、西小川村まで五十七町が間、嬌雲の下を潜りてそゞる歩き、酒酌よすども

汚塵云云
都會に住みて
俗によこれし
心を清めしこ
の義。

丘陵
なかな云ふ、
小高き山。

瑩徹云云
すきさほけて
鏡せしてうつ
さるゝ。

◎時序

(春)

○小金井の櫻花

百六十一

自然の景に酔ひ、思ふまゝ、に心のその汚塵を洗ひ、墨田にまされる興を買ひ得たり。途上に小金井橋ありき、彼方此方の眺め殊に宜しく、橋の北畔に櫻花の碑建つ、遊びし甲斐にと細かに讀みぬ。
序でなればと、貫井辨天に詣つ。辨天は、小金井橋の西南半里、小金井村大字貫井に屬す。祠は丘陵の中腹に鎮し、樹木生ひ茂りて靜幽なり。其高處に登れば、富士、秩父、箱根の諸山、霞を帯びし優しき姿目に入り、詩思をして快豁ならしむ。境内に小池あり、清泉涌出して瑩徹鑑すべく、其末は溢れて懸崖に小飛泉をなす。友曰く、花を小金井に賞するもの來り遊ぶは常にして、夏は深にうたれて暑を洗ふに宜しく、

◎時序

尋常
世のつれ。
み。普通。

興をば云云
まだ遊びたか
りしを思ひき
りてこの義な

短簑
みのご云ふに
同じ。

淙々
水聲の形容。
さらさら

飛泉
たき。瀑布。

行手
ゆくさき。

妙じ云云
微妙ならずと
も書かればす
まさぬこの義

◎時序

(春)

○花の旅

佐保姫のみ恵に解けて水晶砕くが如き谷川の水、淙々として吾が南行を送り、山に遇うては遠ざかり、麓に下れば更に遇ひ、或は左に或は右に、時には飛泉となり、時には早瀬となり、溪橋の袂なる家に宿りては、幾度か枕上の雨と聞きあやまり、昨日は六里、今日は五里、山陽の地に入りてより、四十餘里の旅路を、影の身に随ふが如く、南へくと流れて吾と跡を共にし、八日の夢を重ねて川は瀬戸内海に注ぎ、吾は旅荷を姫路にたらしぬ。問ふ勿れ、是よりの行手何處ぞ。西なる故郷の花は暫し夢に預くべく、東なる名所々の春、妙じからすとも筆に上せでやむべき。

◎時序

尋常
世のつれ。
み。普通。

興をば云云
まだ遊びたか
りしを思ひき
りてこの義な

短簑
みのご云ふに
同じ。

淙々
水聲の形容。
さらさら

飛泉
たき。瀑布。

行手
ゆくさき。

妙じ云云
微妙ならずと
も書かればす
まさぬこの義

◎時序

(春)

○花の旅

(春) ○花の旅 百六十二
秋は紅葉に、冬は雪に宜し、と細かに其勝を説く。げに然なるべし、花なき春の景さへ、既に尋常ならず、況して名を得る避暑や、紅葉や雪やに於てをや。其折々に違あらば、必ず再遊すべく心に期し、盡きぬ興をば夕日に預け、再び汽車に送られ、東京に歸りぬ。某月某日。

花の旅

はしがき

山陰の雪になやみしも夢なれや、短簑にそ、ぐ雨も寒からず、野梅落ち盡して鶯聲うるほひ、竹の垣根には桃花綻びそめ、箴の音やさしう響く谷村、世はげに春なり。

◎春序

(春) ○花の旅

姫路城

涌出
天半に聳ゆる
形容を云ひし
語

巍然
高きさま。

白堊
しらがへ。普
通アと發音す

嗚呼、此城よ、日本三名城の一ならずや。日に幾回となく往來する汽車の人、姫路を通りて一たび北を仰がば、花曇の空に涌出する五層の天守閣、朗かに歌ふ揚雲雀の蝶より小さう見ゆるより、尙高き上に巍然として聳ゆる。晨ならば霞の中に夢の如、薄墨繪よりかすかに暈し出さるべく、夕べならば残日に照し出され、青松白堊いと鮮かに、城の歴史を知ると知らざるとの別なく、あれこそ姫路城よ、見よや白鷺城よと、誰れ言うどなく口々に呼び立つるに、誰かは春の日のうらうらと眠たき目を、拭はざる人のあるべき。愁ひ懐くものは暫

爽快
さつぱりさし
て心地よきこ
と。

樞要の地
かんじんかな
めの場處。

雄鎮
つよきしづめ

人烟云云
人家の多きを
云ふ。

◎時序

(春) ○花の旅

しなりとも心を爽快にすべく、詞人は句に耽り、畫家は寫生の筆をも執るべくや。其西する人、其東する客、天主の影の低う小さう、終には雲に隠る、まで、見返るものも多かるべし。我邦六十餘州、大どなく小どなく、城もちし諸侯は幾百ありしぞや。數ふればとて數知らぬ封建の昔、其名残を留むる舊城樓は、僅かに指を屈すべし。しかも此城よ、山陽樞要の地に存し居り、今に尙當年の雄鎮を偲ばしむ。その多くの旅客に仰がる、亦理ある哉。

所在地の姫路市は、東西凡そ三十町、南北凡そ二十五町、縦横に通ずる市坊一百一、戸數約八千、國內第一の都會にして山陽道中に於ても屈指の繁華地、人烟稠密にして商業殷賑、

◎時序

要衝
主要なる通り
すぢ。

曾て
前かた。前日
に。

牽制
自由の行動の
妨げなすこ
さ。そくばく

(春) ○花の旅

しかも諸街道の要衝、南方一里餘に飾磨港を扣へ、東には市川の流れを帯び、鐵道は山陽線東西に通じ、播但線は南北に通じ、驛にては二線交叉し、運輸至便、今も昔に劣らざるの要地たり。されば、舊城内には曾て歩兵第八旅團を置かれ、近年更に第十師團の本營となり、練兵場の春嚴かに、城櫓には一層の光彩を添へ來り、師團の管する所、豊公が三木の別所を滅し、據りて以て西のかた毛利氏を牽制したる當時に比すべくもあらず。頼母しからずや、我武の發展、市の内外又は附近には、山水風光の好きがある上に、名祠巨刹は多くの人を引き、四時老いやらぬ花の色町、さては愁を洗ふに宜しき酒樓、春の繁華の仲立するものもあるなり。

◎時序

世襲
代々受けつぐ
こと。

疏通
聞きとほすこ
と。

封
知行のこと。

有に歸し
所有となるこ
と。

(春) ○花の旅

若し夫れ、城の歴史を語らば、初め元弘二年赤城定範の築くごころ、のち山名宗全これに據り、織田時代には黒田重隆の有に歸し、其子孝高の世に至り、羽柴秀吉に勸めて居らしむ頃は天正八年の事なりき。當時新に三層の天守閣を築き、後に太閤丸と呼ばれしが是。其後、羽柴秀長、木下定家これを守りたり。慶長五年、池田輝政の封を此地に受くるや、大に土木を起して運河を疏通し、更に五層閣を築く、今存するが即ち其閣たり、のち本多、榊原、松平諸氏交代り、酒井氏の有に歸せしは、寛延年中にして所領十五萬石、子孫世襲して明治に至りて廢せり。其最も趣味ある一事あり。吾れ繰返さざるを得ず。

◎時序

右府
右大臣を云ふ

程を兼云云
二日路を一日
に歩いて東の
方京都にまゐ
る云ふ。

潮候
しほごき。轉
じて、時機。

(春)

○花の 旅

百六十八

磐溪翁の手に成れる『近古史談』豊篇第二の歌人幽古の項に
は、何事をか記されたるぞ、曰く、
織田右府の弑に遇ふや、筑前守秀吉、既に毛利氏と和し、
程を兼ねて東上し、逆賊光秀を討つ。姫路に還ること一日
盡く金銀を收め、以て軍資とし、署分既に定まる。是夕
浴罷み、堀久太を呼び、之に告げて曰く、此城守備に用な
し吾れ將に一擲天下を賭せん、子以て如何とするぞ。
久太曰く、然り、僕を以て之を觀るときは、潮候正に好し
勢ひ帆を揚げざるべからずと。和歌を善くするもの幽古あ
り、進みて曰く、之を芳山の花盛んに開くに譬は、安そ
一たび往きて之を觀ざるを得んやと。黒田孝高、旁より之

賛して曰く
其事に同意し
て言ふには。

此役
このたびのい
くさ。

胸に成竹
心づもり。

覇業の基礎
武力を以て天
下に立つことだ

◎時序

(春)

○花の 旅

百六十九

れを賛して曰く、縦ひ花を觀んと欲するも、時至らざれば
則ち能はず矣。今や風に綻び雨に折き、自ら嬌びし人を招
く時なる乎。時なる乎、宜しく此役を以て觀花の始となす
べき耳と。
嗚呼、豪なる哉、豊公、既に胸に成竹ありとするも、のるか
そるか、自己の身代たる城を一時にかけ、天下の覇業を試み
んとするや。時機熟したり、風潮に乗せよと。嗾す堀正秀、
吉野の花に譬へて勸むる幽古、時なる哉と左袒する孝高、乗
出したる船は美事彼岸に着き、覇業の基礎を開きそめ、終に
觀花の實を挙げ、運よくも僅かに一城を賭して、六十餘州を
博し得たり。嗚呼、豪なる哉、豊公。

◎時序

空囊
からの財布。

多少
いくらか。すこしばし。

習々
東風の吹くさま。まよまよ。

往時
いにしむかし。往昔。

(春) ○花の 旅

百七十

今日しも吾れ、處定めぬ浮草の跡を姫路に寄せ、五層閣を中心に、どり／＼の事かき綴る、あながちに日記肥す埋草ごする勿れ、空囊一擲するに由なきも、探るべき名勝古蹟のかす／＼、さては花の名所、行手に數多あり、豊公が手に唾して起てる此處、吾れ亦花の旅路の筆を起す、多少の縁なからずやは。況や、嵐山の花、芳野の花、春信將に酬ならんとするをや。いざやいざ、東せんかな、習々として心の底まで吹きわたる春風に迎へられて。

附記す。往時は城門、市内に十一、市外に五を設け、以て往來を警しめたるも今は無し。城址は東西凡そ十町、南北凡そ八町、外廓これを圍み、中央に本丸あり、また

射的場
小銃にて的をうつ稽古場。

平野
廣き野原。又は廣き耕地。平楚。平蕪と云ふに同じ。

雲巒
雲のかいりし峰。遠山を云ふ。

◎時序

(春)

○花の 旅

百七十一

濠を透らす。本丸以外の地は、現時練兵場及び射的場に供せられ、舊城内には第十師團司令部あり、五層の天守閣は、即ち其中央に聳ゆ。若し閣上の人となり、四方を見渡せば、北は一帶の連山起伏して波の如く、東西は概ね平野打ち開け、南は盆池にも等しき内海、星散する島嶼を中に、烟波を隔て、四國の雲巒を望み、往來の白帆さては汽船、如何に詩興を引くべくや。下瞰すれば、全市の粉壁碧瓦、走せ交ふ汽車、寸馬豆人、みな畫中の物たるべきもの特別の許可を得るにあらざれば、登臨して今し想像し得たる景に接するを得ざるなり。姫路を距る北へ二里餘の名高き書寫山圓教寺は、訪はん

◎時序

北枝
俳諧師の號。

餞別
はなむけ。

横斜疏影
梅の枝のさま
又は其影を云
ふ。

花期
はなごき。花
候。

(春)

○花の旅

百七十二

の念絶ちたれど、絶ちがたかりしは北枝が、白露もまだ
あら簑の行方かな、この句を菅簑に書し、芭蕉翁に餞別
として贈れる其簑を埋めし、芭蕉翁簑塚、相接して建て
る風蘿堂なりしも、それよりそれへ歩を運ば、二古蹟
の所在地なる増位山には隨願寺あり。その又峰續きの廣
峰山には廣峰神社、其處を下らば花は既に塵となれるも
横斜疎影をしのぶ白國梅林、相隣りては白國神社 訪ふ
べき處は限りなく、志す西京南都の花期は迫りぬれば
一刻を誤らば不可なりと云ひなす櫻、後れてはならじと
心ならずも近き處のものまで訪はで、姫路の城下を後に
ぞせり。

遺跡

以前に或物事
のありたる所
古蹟。

左遷

高官より卑し
き官職におこ
さるゝこと。

途次

みちすがら途
中。

◎時序

曾根天満宮附曾根の松

此宮よ、説くまでもなき菅公の遺蹟、社格は縣社、祭神は
天穂日命と菅原道實、曾根村の氏神なり。賽するには曾根驛
よりすべく、路は十五六町の上に出づべし。境内は約四千坪
社頭極めて嚴かに、水戸彰考館の人、松拙忠の撰せる菅公廟
記は世に名高く、社寶の一たり。

世に曾根の松と呼ぶは、菅公筑紫へ左遷の途次、み船を伊保
の湊に寄せ、檜笠の岡に登りて四方の景色に心娛しめて後、
岡なる稚松を抜き、手づから之を社地に栽ゑ給へり。即ち今
の曾根の松は是。岡は神社より、一町許の西に在り。松は社

(春) ○花の旅

百七十三

◎時序

當初
そのとき。は
じめ。

翠雲
松の色の形容

細鬘云云
松葉のこと。

無絃の幽琴
松風の形容。

工云云
工事の半途。

(春) ○花の 旅

百七十四

門を入りて東に訪ひたり。當初のは枯れ。古幹は之を拜殿に納めらる。現在いや榮ふものは、天明元年親樹の傍より生ぜし、實生のもの成長せしと傳へられ、年を経る一百三十餘、高さ約三丈、幹は三圍餘、枝葉の繁茂すること東西十七間餘、南北二十間餘、見るからに翠雲地に布き、陰は古苔に生じ色は春烟を籠めて、細鬘針をあつめ、風度れば無絃の幽琴を奏で、雪に霜に幾百年の操をあらはす、菅公の餘徳貴し。

石寶殿。觀濤處

神代の遺物と傳ふる此寶殿。大已貴と少彦名の二神、一夜の中に石の御殿を造らんとし、工半ばにして鶏鳴き天明けそめ

神體
神の本體。神
社にて神の體
さして祀るも
の。

稚松
わかまつ。

賽
まあること。
さんけい。

丁々
石切の音の形
容。

◎時序

(春) ○花の 旅

百七十五

ければ、其儘に打棄て置き給ひしものどかや。石殿は即ち神體、一に静ヶ窟と稱し、高さ二丈六尺、幅二丈三尺、其形は社殿を横に倒したるもの、如く、屋根を西にし扉は天に向ひ其上に土を留めて一二の稚松生ず。賽人は寶殿の底に面して拜するを例とす。祭神は大已貴神と少彦名の神、社格は縣社生石子神社と號し、石殿の前に拜殿を設けあり。賽せんとするものは、寶殿驛に列車を下り、生石子村龍山に達すべし。此處全山殆ど花崗石にして、石切る音の丁々と春も尙寒き心地す。長閑に鳴く鶯の聲聞き、つ、山の東腹に至れば則ち石寶殿を得べきぞや。

觀濤處は、石寶殿より南に方れる小山の南腹とす。巨岩に觀

遺業
其人の死後に
のこせる事業

◎時序

青螺云云
何島く、こ一
々指にてこし
示すこと。

鬢影
遠山のかげ。

市坊
まち。市街。

龍の云云
長橋の水上一
臥する形容。

風致
おもむき。け
しき。風景に
同じ。

◎時序

(春) ○花の旅 百七十六
濤處の三文字を刻す。河合寸翁の遺業にして、江戸の人當時
姫路の儒臣たりし永根文峰の書なり。此處より見渡せば、伊
保、曾根、大鹽等の部落を隔て、播磨灘を望み、西南は遠く
家島群島の青螺を指點すべく、眠るが如き春の海、白帆の影
も長閑に、四國の峰巒は夢の如、依稀たる鬢影を雲外に認む
東には淡路島山、半ば霞みて牛の臥するが如し。げにも觀濤
の名に背かず、石寶殿と共に播磨名所として探り漏すべから
ざる處ぞ。しかも櫻樹多く、花こそまだ蕾かたけれど、紅粧
を試みそめしものもあり、旅路の心を慰むるに足る。

高砂

尾上と共に松に名高きは此處、海濱に沿うて二十八の市坊を
成し、戸數約一千三百、加古川口を隔て、尾上村と相對し、
油の如く緩う流る、碧水に、龍の飲むが如き二百餘間の長橋
架す、相生橋と呼び東西相通ふに便す。往昔、海岸には松樹
茂りて林を成し、和歌には多く松、月、鹿を詠まれしが、世
の開くると共に松を伐りて宅地とし、民家の殖ゆくま、に
大に風致を失ひ、今は却て尾上に松多きを見る。

誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
とは、藤原興風の作。
浦かけて月すむ夜半は高砂の尾上の鹿やこころわくらむ
とは、平兼盛の作。斯く古歌に高砂の尾上と續けて詠みしを

(春) ○花の旅

百七十七

上古

おほむかし。

◎時序

凱旋

いくさに勝ちて歸ること。

謡曲

うたひ。能に合せてうたふもの。

壽色

めでたきいろ

天正の役

天正年間合戦。豊臣秀吉と毛利氏との戦争。

寶塔

塔のこと。寶は敬稱。

八重の沙路

遠き船路海路

◎時序

(春)

○花の旗

百七十九

見れば、上古尾上は高砂の部落なりしを、後年民家のふねゆくに従ひ、別に一村を成すに至れるもの乎。

高砂神社。相の生松

素盞鳴尊、大己貴命、奇稻田姫命を祭れる縣社、社門を潜れば正面に本社、東に尉姥神社、社背には末社九座あり。神功皇后三韓より凱旋せらるゝや、此濱邊に着し給ひ、國家鎮護として創建させられし舊社。現在の殿宇は、元和三年姫路藩主本多忠政の造營とぞ。

高砂謡曲にも見わたる相生の松は、老幹龍鱗をたみ、千代萬代の濃翠、霜を犯し雪に堪へて壽色多く、枝葉の茂ること方二十餘間に及び、環らすに石柵を以てす。此松、初代のは

枯れ、二代のは天正の役、毛利家の一族兒玉某伐りて篝火の料とし、今のは三代目のもの。之を尉姥神社の前に訪ふべし社境は約三千六百坪、右の高砂城は、此近傍に在りしとぞ。

高麗佛

高砂町の西に十輪寺あり、境内に石塔婆九十餘基建つ。そが中央に寶塔聳ゆるが、即ち高麗佛と稱するもの。文祿年中、豊臣秀吉朝鮮征伐に際し、八重の沙路を越しゆく舟子百人を此地に募る。凱旋の途次、その内の九十六人海中に溺死せしにより、塔を建て、其靈を祭れるものとぞ。

尾上神社。相生の松。片枝の松
尾上の鐘

◎時序

幽靜
しづかな

狀を異にし
かたちの同じ
からざる

奇趣千態
くしきおもむ
きがさまざま

松露
一種のきのこ
參覽

雌雄二幹
めごとをこふた
こも

奇觀
くしき見もの

釵千股

松葉の二本が
またになりし
なにかんざしに
比して云ふ語

謾々
松風の形容ぞ
う

◎時序

(春) ○花の 旅

百八十

社格は郷社、祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命、高砂神社と同じく、神功皇后の御造營と傳へられ、之を尾上村の松林中に賽すべし。境内は三町五畝歩、外に尾上の林と稱する松林あり、廣さ約十四町五段八畝歩、地たる幽靜にして松は皆その狀を異にし、臥して眠るが如きもの、起ちて舞ふが如きもの、一枝は低れて一枝はあがるもの、奇趣千態、白砂に映する黒き影、龍の横ふかとも疑はれ、樹はみな古くして年を記し難く、月前には波濤の聲を起し、風外には琴筑を奏するなど。風景略舞子の濱に似たり。松林には松露を産し、此地名物の一に數へらる。相生の松、片枝の松、共に神社の境内に在る名木。相生の松

は一樹にして雌雄二幹を生じ、僅かに地を離れて相岐る。その大きさは、高砂の松に劣れども亦一の奇觀たるを失せず。見上ぐれば千古の寒翠濃やかに、上は天を拂ひ下には雲を流し、白猿は子を窺ひ、黄鶴は巢を營むの趣を存し、微風度れば小琴の音をなし、松子落ちては時に靜寂を破り、こぼれ松葉の釵千股、清き砂の上に自然の模様、又なき景色なり。片枝の松は、拜殿の左側に在り、枝と云ふ枝、盡く東に向ふが故、都戀しき片枝の松と呼ぶ。由緒ありげに思はるれど、只松吹く風の謾々と、誰に言問はん由ぞなき。尾上の鐘は、社前なる一字の中に在り、高さ三尺二寸、周圍七尺七寸、厚さ一寸九分、疣三十六、花形四寸、古歌に

(春)

○花の 旅

百八十一

◎時序

名鐘
有名なる釣鐘

延長
のび廣がるこ

稀世
世にまれなる

所以乎
わけてあらう

(春)

○花の旗

百八十二

高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やたくらん
と詠まれたる名鐘は是。相傳ふ、神功皇后、龍宮より得給ひ
しものと。當社第一の寶物たり。

手枕の松

幹の大き二圍餘、枝葉の延長すること東西四十八間、南北十
三間、寒翠春に逢うて轉濃やかに、雲の地に這ふに異ならず
是も亦稀世の名木。其一枝地上に横はり、人の腕を枕として
眠れるが如きあり、手枕の名を得る所以乎。之を訪はんには
別府に鎮する村社住吉神社境内にすべく。春の波さら／＼と
打ち寄する濱邊、秀でし松林に入りて鳥居を得、その右の方
に蟠る古松こそ、則ち手枕の松と知れ。富小路貞直卿の詠に

風吹けば木蔭も浪の荒磯にたれかいをねし手枕の松

二見の浦。印南の浦

萬古云云
幾千年もの霜
や雪の苦節
堪へて色のす
ぐらゝいこそ

勝區
けしきのすぐ
れたる處名勝

所謂
世にいふ所さ
の義

◎時序

(春)

○花の旗

百八十三

萬古の霜雪に秀でたる松樹、波うち寄する濱邊に連なり、そ
の翠色白砂に映じ、東南には淡路島山、春の霞に眠るがあり
眺めなかく／＼に棄て難し。此處、古よりの勝區にして、東二
見、西二見に分れ、西二見には天神の社あり。
印南の浦とは、此處より海岸別府などの間を云ひ、古詠多き
中に夫木集に、

播磨なる印南の浦に船出して朝漕行けばやまどしま見ゆ
とあり。又、この近海に於て章魚の子を漁獲す、所謂海藤花
と稱するものにして、播磨の一名産たり。

◎時序

(春) ○花 の 旅

衝にして
主要地なり、
の義。

都邑
みやこ。都會。
大名の封地。

三日の節句
桃の節句。重
三。

潮落ちて
潮ひきてこの
義。

明 石

此處、松平氏八萬石の舊城下、中國街道の衝にして土地平坦
西に明石川を帯び、北に丘陵を負ひ、南に明石港を扣へ、國
中にて姫路に亞ぐの都邑、市坊の數五十九、觀るべきものは
舊城、岩屋神社、休の天神社、人丸神社、長壽院、月照寺、
光明寺等にして、明石鯛は夙に著名なり。

因に記す、明石とは蓋し赤石の意にして、港の西一里の
海中に、平面の大なる赤き石あり、この赤石、毎年三月
三日の節句に、潮落ちて水上に露る、を見にゆく人多し

舊 明 石 城

◎時序

(春) ○花 の 旅

老松翁鬱
年古る松が茂
ること。

粉壁
しらかべ。

凡ならず
普通でないす
ぐる、この義

人烟
民の炊ぐ烟轉
じて人家の義

老松翁鬱として城樓其間に聳け、朝日に映ゆる粉壁、春の夕
日に花の影浸す濠の水、猶むかし床しき心地ぞする。城は元
和年間小笠原右近太夫の築く所、今は 皇太子殿下の御別邸
となる。又、一部は公園に供せられ、青松に雜るに櫻花あり
春色凡ならず。鎮座する明石神社は、藩祖の靈を祀るもの。

人 丸 神 社

城趾の東に續きて、人丸山と稱する小丘あり、此處に人丸神
社鎮す。祭れるは日本六歌仙の一人なる柿本人丸の靈、創建
不詳、元和年間、小笠原氏明石城主たりし頃は、舊城内に在
りけるを、のち現地に移せりとぞ。此よりは淡路島を望み、
内海に往來する春帆も尙手に取るべく、明石の人烟は俯して

◎時序

席間に云云
座したる儘に
眺め得るこの
義

一盲人
一人のめくら
あるめくら

撰
作るこそあ
らばすこそ
作

(春) ○花の 旅

百八十六

双眸に收むべく、社前なる旗亭に憩は、遠近に於ける海の
景、之を席間に弄するを得。
賽するには、東西二ヶ所よりすべく、各華表あり。西なる華
表の傍に清泉の涌くを、龜の井と云ふ。世に名高き盲杖櫻は
社前に在り、相傳ふ、むかし一盲人、遠く筑紫より來り、
ほのくど誠あかしの神ならば我にも見せよ人丸の塚
と詠み出でしに、不思議にも其目忽ち開き、明かに見ること
を得しかば、今は用なしとすがりし櫻の杖を地に挿して去り
しに、其杖より枝葉を生じ、終に成長して今日に至れり。
人丸の碑は、盲杖櫻と相對して建てり。寛文年間、藩主松平
信之の建設に係り、文は林道春の撰なり。

古來

いにしへより
むかしから

國詩
和歌を云ふ。

苦屋

さまぶき屋根
の小屋。多く
漁家のことを
云ふ。

伊

ひろ。支那尺
にて八尺。我
邦にては六尺
尋も同じ。

◎時序

明 石 浦

明石浦とは、明石町海濱の總稱、明石瀉又は明石の濱とも呼
ばれ、古來有名なる勝地。人丸の、ほのくどこの國詩をはじ
め、此地を詠まれたるもの多し。順徳院のには、
あかし瀉あまの苦屋の烟にもしばくもる秋の夜の月
ど。俊恵法師のには、
夜をこめし明石のせとに漕出れば遙にわくるさを鹿の聲
ど。又、明石港は南に面し、水深六仞乃至十仞、築ける波止
場は海中に突出し、能く風濤を防ぐ。しかも水清く波靜かに
夏の海水浴に適す。停車場を距る僅かに十町、集望閣、濤衝
館共に投するに足るの旅舎なり。

(春) ○花の 旅

百八十七

◎時序

旅宿の花
行きくれてさ
の一首の和歌
なり。

因に記す
ついでに書き
つくるさの義

蒨蔚
樹木のしげる
形容。

皓潔
まツしる。

枝幹屈曲
枝やみきがま
がりくねるこ
ろ。

牀
こしかけ。
さも云ふ。榻

旗亭
料理屋又は旅
舎を云ふ。

◎時序

(春)

○花の旅

忠 度 塚

市内忠度町に、薩摩守忠度の墓あり、墓前に旅宿の花の碑又
墓側には朽ち残れる一本の松あり。何れか哀れならざらん。
ゆきくれての一首を誦すれば、いと今吾が身の上に切な
り。因に記す、忠度の腕塚は、兵庫の西なる駒林にありて、
討たれたるも亦其處なり。此處なる明石のは猶考ふべきもの

舞 子 の 濱

名さへ優しき此處舞子の濱、山田より西垂水に至る七八町の
間、古松蒨蔚として林を成し、北に丘あり、南は明石海峡を
隔て、淡路島に對し、濱の砂は白玉を散ずるが如く、遠く望

めば雪を欺くばかりの皓潔、其間に生ふる青松數知らず。高
さは皆二三丈に過ぎずして枝幹屈曲、這ふものあり、舞ふも
のあり、走れるあり、躍れるあり、其這ふものは龍の如く、
舞ふものは鳳の如く、曰く何、曰く何、誰か一々これを状し
得べき。濃翠滴りて衣を染むる下に逍遙すれば、處々に亭あ
り、亭に牀あり、就て憩ふべし。世は花ならんとする此頃、
限りなき興に限り無き景色なるに、夏の納涼は如何に、秋の
月には如何にと心に描かれたりし。

後方の丘上には、有栖川宮殿下の御別邸あり、街道の南なる
海岸に沿うては旗亭あり、四季共に酔ふに宜しく、名物には
松露糖、舞子焼と稱する雅致愛すべきの陶器なり。さても此

鳴門
阿波と淡路島
との中間なる
海峡。潮流の
急なるを以て
名高し。

◎時序

(春) ○花の 旅 百九十
地を舞子と云ふは、舞込の意なる由、鳴門の潮流の舞ひ込み
來り漂ふ所なれば、その昔は舞込と云ひけるを、何時とはな
しに、舞子との字を用ふるに至れるなるべしとぞ。

須磨並附近探勝

伊泉云云
伊紀や和泉の
遠山が遙かに
見ゆるを云ふ

翠屏
山を屏風に比
して云ひし語

古來世に聞わたる此處、東須磨西須磨にわたる一帯の海濱、
水清く沙明かに、處々に青松點綴し、前に阿波、東にかけて
は伊泉の雲巒夢の如、春波縹緲の末に延きはね、近き淡路島
は呼ば、應へん風情のやさしさ、北は山高く聳て翠屏を打
ち遠らし、附近に於ける名勝古蹟は數知らず、殊に源平戦史
に關するもの多く、一々探り盡すべくもあらず。東西須磨の

今に尙
今日に至るも
昔の如くにさ
の義。

春帆細雨松
風海月
海邊に於ける
四時の風光の
形容。

大要
あらまし。

◎時序

(春) ○花の 旅

百九十一

五色山。海神社

相訪はんには、西よりする人は舞子の次驛垂水よりすべく。

戸數約四百、今に尙簾を軒にかけ、且つ名物の松風村雨磯馴
味噌を賣る家床しく、眼に觸る、もの書景ならぬはなし。附
近には、年毎に殖むゆ紳士紳商の別荘は厭ふべしとは云へ
土地に繁華を添ふるの點、あながちに咎むべきに非ず。又多
くの旗亭あり、春帆細雨に對して酌むに宜しく、名風海月に
涼を納る、に宜しく、秋の月夜の白沙に歩するも、霜夜に千
鳥聞くも、雪の晨に簾捲くも、他所に得難き興なるぞ。左に
は、吾が訪ひし名所々の大要を記し試むべきも、同士に示
さん便を圖り、須磨を中心として物すべし。

◎時序

三韓
今の朝鮮の古
稱。馬韓、辰
韓、辨韓、後
百濟、高麗。

名とし
其事を口實と
なして。

攝政
君主に代りて
大政を行ふこ
と。

靈驗
不思議なる感
應。

天險
天然自然の險
阻。

判官
義經のこと。

懷古
むかし有りし
事を偲ぶこと。

◎時序

(春) ○花の旅

百九十二

東よりする人は、須磨、鹽屋を経て又同驛よりすべきぞ。五色山は、垂水驛を距る西北五町餘の處とす。仲哀帝の皇子麿阪、忍熊の二王子、神功皇后三韓より皇子を擁して京師に入らんとし給ひしを、仲哀帝の御陵を築くを名とし、邀へて之を防ぎし遺墟、五色塚とも云ふ。又、一説に、阜上には數多の壺を埋むと、故に千壺との稱もあり。

海神社は、停車場の側に鎮する官幣中社、一に垂水神社とも稱す。祭神は底津綿津見神、中津綿津見神、表津綿津見神にして、神功皇后の攝政元年の創建に係る。社地は石垣をめぐらして、松樹長へに相護す。俊頼朝臣が、わりのぼる人の爲とや茲にしもあとを垂水の朱の玉垣

と詠じたるはこの宮居なり。海上を守らせ給ふ神にして、靈驗いやちこなるが故に、海神社と云ふとぞ。

一の谷。敦盛塚

一の谷は源平の古戰場、中にも哀れを留めたる敦盛にて名高き此處、境川と云ふがあり、俳人芭蕉は、

蝸牛角振り分けよ須磨明石

と歌ひき。鐵拐山は一の谷の上に聳ゆる高山、眞に天險たり半腹に判官鐘懸松あり。山麓を戦ひの濱と云ふ、むかし激戦ありし處とかや。山に沿うて古跡塚と云ふがあり、平經政が城の四郎に討たれし處と傳へらる。春を歌ふやさしき雲雀の聲を耳にも入れて、懷古の涙をそ、ぎつ、三の谷に至れば

(春) ○花の旅

百九十三

◎時序

五輪の石塔
石造の五輪塔

七八段
七八町と云ふ
に同じ。

組討
捨鬮のこと。

句碑
俳句を刻した
るたて石。

細流
さいやかなる
ながれ。小川。

鳴咽
水の石などに
支へられて期
かなる聲を發
せぬこと。水
までも悲哀を
帯ぶその形容

制札
禁止の箇條を
記したるたて
ふだ。

◎時序

(春) ○花 の 旅

百九十四

敦盛塚あり、五輪の石塔にして高さ一丈四尺、臺石は方四尺許、一層毎に梵字を刻む。あはれ多年の露霜に晒され、苔蒸してなかに哀れ深く、心に當時を描けば、七八段計の沖より、敵の招きに應じて馬の鼻面返せしこと、花耻かしき若武者が殊勝にも、波打際にての組討、ありくと目に浮ぶ。塚の前に蕎麥店あり、敦盛蕎麥とて名高し。

現光寺。關屋址

現光寺は、俳人似雲風月庵の遺跡、松尾芭蕉が、

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋

と詠みし句碑淋しく建つ。この邊を藩架と云ふ。むかし關屋の設けられし處なればにや、關屋跡と刻みし小さき碑あり。

西を流る、細流をば、千森川と云ふ。一の谷城の外濠の名残とかや、水源は青谷山なり。

須磨寺

此寺が、福祥寺の俗稱ぞ。春水鳴咽して流る、千森川に沿うて上ること數町、二王門を得、門を潜れば松の並木あり、左手に蓮池を望み、右手には數多の櫻樹あり、二分の春色を漏す、一週餘の夢重ねもせば、香雪天に漲らん。毀れたる築地あり、彼の誰も知る所の一枝を折るものは、一指を斷るてふ

制札立てし若木の櫻あり、行くく寺門に達す。當山は開鏡上人の開基、光孝天皇仁和二年の創建、本尊は栴檀木三尺五寸の聖觀世音なり。むかしは坊舎十七字を

(春) ○花 の 旅

百九十五

源平躑躅
紅白に咲き分
じくる花のついで。

◎時序

遺品
かたみの品。

聞説
聞道とも書す
きくには。き
くなるの延言

名所圖繪
名所の繪にし
たる本。

海光帆影
海のけしきの
形容。

是非の詮議
よしあしのせ
んさく。

◎時序

(春) ○花の嵐

氏あり、邸内には菅公御手植の松、菅の井などあり。又、同家の邸に生ふる燕子花は、攝津名所圖繪にも見わて名高し。

稻葉山。松風村雨堂

稻葉山は、驛より北へ十五町、是も急ぎ足して訪ひたり。山とは云へど只小高き丘、東須磨と西須磨とを界し、丘上の眺めは、言ふまでもなく海光帆影を弄すべし。中納言行平の立別れ稻葉の山の峰に生ふる松としきかは今歸りこんど詠みしは此處とも云へど、因幡の岩美郡稻葉村にも同名の山あり、一に因幡にも作らる。所謂名所は、かゝる所に趣存すべければ、是非の詮議は専門家に預け、聞くがま、に斯く。松風村雨堂は、少し東南に在り。堂を蔽ふ古松のみどり

(春) ○花の嵐
有したる由なるも、今は寂びて憐れ深し。仰げば源平躑躅にて造れる馬盃あり、無官大夫敦盛の遺品とぞ。寺寶の名高きものには辨慶の鐘、青葉の笛、敦盛自筆の和歌、辨慶筆櫻の制札等にして、有りし昔の事共を偲ぶの料に足る、重衡腰掛松は之を途上に訪ふべし。

網敷天神

京都の花に心せきながらも、又と云は、折あるまじと、須磨驛の東五町、緑滴る松林の中に網敷天神に詣でぬ。聞説、菅公筑紫左遷の時、船をこゝに泊し、纜を圓坐とし憩ひ給ひし舊跡なりと。社格は郷社、殿宇は壯麗と評すべからざるも、境たる幽靜、しかも風色に富めり。程遠からぬ處に舊家前田

手向の香烟
吊ふ線香のけ
ぶり

◎時序

講居
左遷されて邊
鄙に住むこと

楓樹
ちかへで。もみ
ぢ。

(春) ○花の旅 百九十八
濃やかに、手向の香烟春淋しく、山鶯空しく晝を鳴く。

厄除八幡宮

此宮、詣でざりしかど、須磨の北一里許なる多井畑村に鎮す
多井畑の厄神とも云ふ。又、村内に須磨の長者が娘、松風、
村雨の墓あり。むかし行平講居の折から、變らぬ契りの春を
こめしどか、古き書どもに見ゆ。

附記す、鷹取驛よりして訪ひたかりしは、楓樹に名高き
禪昌寺と大日寺との春、妙法寺村には苔寂びし那須與市
宗高の墓、大手村には四季の花弁に富める清遊園、在原
行平が建立と稱する因幡薬師、其西には行平が賞月亭の
舊蹟たる月見山なごなりしも、さまではと神戸に入りぬ

神戸の二日

余は會て、田中氏の手に成れる神戸港の記を読みたり、其記
に曰く、

三十餘年前、細草離々たる寒烟の村は、變じて二十五萬の
大都となりぬ。されば四十年前、神戸を去りて今日歸り來
る人あらば、彼は終日全市を彷彿も遂に其故郷の片影だも
認め得ざるべし。其漁網を曝せし砂濱、其耒鋤を取りし青
隴、今何處にか其跡を求むべき。吾人は開港前の神戸を想
像せんと欲して、恰も亞刺比亞夜話に魅せられしが如き感
なくんば非ず。試みに三十餘年前、湊川堤防に立ちて東方

◎時序

其漁網云云
寒村の當時の
形容

細草云云
草茂りて淋し
き村。

會て
まへかた。前
日。

(春) ○花の旅

◎時序

弱 強の對。十町には足らずしてこの義。

石標 目じるしとし立てたる石

激變 此處にては急激の進歩。

(春) ○花の旅 二百

を望まん乎、道は十町弱にして茅舎鶏犬の村に没す。道幅二間許、兩側に並木松二十餘本、之れ西國街道なり。下りて西國街道を西に進むこと數町せよ、路傍に石標あり、左に楠公の碑あるを示す。旅客若し石標の導くに從ひ、荒草を踏んで蛇の如き細徑を辿らば、赤松數株の下、蕭條として楠公碑石の立つを見ん。而して其石標の立ちし處こそ、今日の神戸停車場にして、荒草にたく露に旅客の裳を濕せし當年の細徑は、今日神戸に於て最も繁華の區たる、多聞通なりと聞かば、誰か其激變に驚かざらんや。と。海には大小の船舶波を壓して浮び、其出入するもの日に千を以て算すべく、陸は東西二里、南北三十八町、地の高低

◎時序

碧瓦鱗次 屋根の瓦がうるこの様に並ぶこと。人家の建ち並ぶ形容。

開拓 山野又は險地などな平地にする

一要津 かなめなる一つのみなこ。

(春) ○花の旅 二百一

に隨うて巨館建ち、紅樓聳わて碧瓦鱗次、慶應三年開港以來一長足の發達進歩、我邦に於ても其比を見ざる所、尙腹脹して休まざる此處、近年まで神戸と兵庫とを界せる湊川堤防は老ひし松のみぎり濃く、南北にかけて一文字を畫せしも、今や開拓せられて平地數十町歩、新に市街を形成す。田中氏の記は十年前の筆、猶且つこの小變遷あり、吾れ再び此地を過らんか、更に一層の繁華を來さん。神戸は新しき都會に相違なきも、市の西部なる兵庫に沿ふの兵庫港は三百年前西海の一要津たりしを忘るべからず。又南北朝時代に於ても、一の港たりしことをも記すべきなり。筆載せて吾々の尋ぬべきは、近き歴史の外、源平交戦の事をは

◎時序

固より
言ふまでもな

雌雄の飛泉
大小のたきご
の義。

壯觀
立派な見もの
偉觀に同じ。

(春) ○花の 旅

二百二

じめ、南北朝に係る事、詩料極めて多きぞかし。
此地に旅荷解きし時は、一つ二つ探り見ん心なりしも、三つ
四つ五つ、はては其大方を經廻り、遠き阪路まで犯し、春に
切ならぬ布引瀧にも及ばしぬ。固より妙じくもあらぬ日記文
旅路の跡を留めんとての筆、例によりて左に、

布引瀧

布引山は、神戸に於ける名勝の最もうべくしきもの。此に
雌雄の飛泉懸る、其狀恰も布を晒せるが如し、故に名を得
雄瀑は山頂より見るべく、直下十五丈、幅一丈三尺、壯觀と
す。雌瀑は、老樹茂れる中に懸り、高さ七丈三尺、幅一丈二
尺、水は岩角に觸れて挫折し、奔注や、緩なり。其前に長廊

◎時序

開鑿
きりひらくこ

鑛泉
鑛物の質を含
む泉。此處の
は冷泉。わか
す。浴に供

上水道
飲料川の水道
下水道の對な

を架し、側に茶店あり、就て見るべし。今は此二瀑布、神戸
上水道の源泉たり。
山の麓に鑛泉あり、布引炭酸泉とて名高く、浴場の附近には
客を待つ旗亭多く、酌むに宜し。瀑布は此處より山路に就き
二町餘に雌瀑を得、尙三町餘の上に雄瀑を得るなり。又、山
に接して、川崎氏の美術館あり。

生田神社。三の宮神社

官幣中社生田神社は、生田森に鎮す、祭神は稚日女尊、神功
皇后攝政元年の創建、攝社四座あり。社の東には生田川あ
り。此川の水鳥は大和物語に記されて名高きも、近年新生田
川を開鑿し、今は宅地に變じて跡もなし。又、小山田太郎高

(春) ○花の 旅

二百三

◎時序

青麥 兵糧盡きて熟
せぬ居民の夢
を刈りしこ
其罪を問は
ざりしに感激
し、義貞の爲
に防戦して死
せり

露店 道みせ。大

(春) ○花の旅

二百四

家の青麥は、太平記に見て誰知らぬものぞなき。
鎮座地の生田森は、源平の古戦場にして、一の谷城の東門を
設けし地、境内には籬の梅、梶原井戸、敦盛萩、生田池など
の古蹟多し。賽するには、三の宮停車場よりすべく、相距る
僅かに四五町、下山手通一丁目とす。
三の宮神社は、停車場の側にして祭神は湍津姫命。境内は劇
場人寄席、遊戯場、露店多く雑沓厭ふべし。昔は西方に河原
兄弟の墓ありしも、今は城ケ口に移され、僅かに名残の一本
松に盡きぬあはれを留む。南に下れば舊の居留地、石造や煉
瓦造の家屋厳しく、田舎者の吾には洋行せる心地するをかし
き。東には内外遊園地あり。芝生の色春に青みて美しく、緑

憐れなり
愛すべしと云
ふ義。

丘陵 山。小高き

長汀曲浦 遠きにわたる
入江の形容。

佛 云ふ。ふらんす國を

◎時序

諏訪山

の毛氈敷くに異ならず。處々に栽ゑられし樹も外國のもの多
く、一二株の櫻、花綻びそめしが殊に憐れなり。

山本通の北に聳わたる丘陵こそ即ち諏訪山、春霞帯びし樹立
の中に石段た、まれ、登れば諏訪明神の小祠あり、祭神は倉
稻魂命、俗に諏訪山の稻荷と云ふ。絶頂は平坦にして芝生
緑氈を敷く。見渡せば西に須磨の浦曲や鷹取の山々を望み、
東に住吉、御影の長汀曲浦、春霞の斷續たるを隔て、は河泉
の峰巒、中に蒼茫たるは大阪灣、淡路の島根は固より、其南
のはてには紀伊の連山は夢よりも淡く影をひく。又、佛の天
文學者ジャンセン氏が、西曆千八百七十四年金星を測候せし

(春) ○花の旅

二百五

◎春序

高燥の地
たかみの土地

古刹
ふるき寺院。

多き由
多き由なご
の義。由は實
地に見開せぬ
を推測する語

(春) ○花の旅

金星觀測所の紀念碑建つ。山の麓には酒樓旅館軒を並べ、何れも高燥の地を占め居れば、海の景色を席間に弄し得。

再度山大龍寺

神戸第一の古刹、弘法大師の開基にして古義真言宗、神護景雲二年の創建。本尊は如意輪觀世音、行基僧正の作なりとぞ所在地は諏訪山の背後、山麓まで市よりして約二十町、本堂の奥には弘法大師堂あり。月の二十一日には再度の大師廻りとして、參詣するもの多き由。再度山の名は、弘法大師の二度登山せしより、名づけられたるもの。程近き谷に狸々の池あり、汲めども盡きず、飲めども盡きぬと云ふ狸々の謠より命せる名とかや。旅池は、俗に再度の池とも云ひ、山に入らん

激澗

水のたまる形
容。波光のた
ま。いよひ動くさ
ま。

自刃

自殺に同じ。

菩提所
香華院に同じ
だんなでら。

◎時序

(春) ○花の旅

とする處に、激澗として春水を湛ふるものを云ふ。
楠寺
楠寺とは、蓋し廣嚴寺の俗稱、元享元年元僧俊明極の開基、本尊は藥師如來、後醍醐帝の御寄附あらせられしものと云ひ、行基僧正の作とかや。昔は勅願所にして、所在地は湊川神社の北三四町とす。建武三年正成湊川の合戦敗れて一族七十三人この寺の客殿に自刃したるより、俗に楠寺と云ふに至り、楠公の菩提所たり。今に尙楠氏の遺物を藏す。境内に俳人芭蕉の句碑あり、撫子にかゝる涙や楠の露
又、傍に朽ち残る梅の幹あり、幹の下に碑建つ、藤堂龍山公

◎時序

(春) ○花の 旅 二百八
の撰なり。この古梅こそ、楠氏の碑の側にありしを、此に移
植したるものなれ。

社格
神社の格式。

湊川神社

社格は別格官幣社、祭神は贈正一位楠正成公なり、故に人呼
んで楠公社と云ふ。社殿は明治五年の造営に係り、境内約三
千坪、南向の正門を入りて東すれば、松樹の下に有名なる所
の『嗚呼忠臣楠氏之墓』てふ碑あり、元祿四年水戸黄門光圀
卿の建設、裏面に銘あり、明の遺臣朱舜水の撰なり。境内に
は水族館、在郷軍人会、勸工場等あり、しかも晝夜參詣の人
絶ゆることなく、露店など多く殊の外なる賑ひなり。末社に
稻荷神社あり。繪馬堂には、千早城門の遺木を納む。

黄門
中納言の異稱

明
支那の王朝の
名。元の後。
清の前。

◎時序

(春) ○花の 旅

二百九

兩不存
南北朝の事は
昔の夢にて思
も仇も今はな
しこなり。

凄凉悲愴

すこくしてい
たましきこも

描かずば
想はずばこの
義。

菅茶山『宿生田』詩に曰く、

千歳恩讐兩不存 風雲長爲吊忠魂

客窓一夜聽松籟 月黒楠公墓畔村。

と。げに多くの年月經し今日にては敵も味方もなし。唯長へ
に忠魂を吊ふべきぞ。或夜生田の里に宿りしに、月黒く松風
のみ颯々たりと、文字以外に凄凉と悲愴との意を含み、懐古
の念を賦したるも、今は繁華の中心とも云ふべき多聞通の二
丁目、此詩と同一の景に非ず。詩を讀むもの、能く當時の地
を心に描かずば、二十八字も意味なきものになるべし。思ひ
出しま、斯くは最後に記しぬ。

能福寺

◎時序

金銅
からかれ。

寂び深し
年経しさまが
大に見ゆるこ
の義。

大檀林
大寺院この義

入寂
僧侶の死する
を云ふ。

(春) ○花の 旅

之を兵庫北逆瀬川町に訪ふべし。金銅の大佛を安置す、故に
兵庫の大佛と呼ぶ。佛の高さ四丈餘、年來の雨と風とに曝さ
れて寂び深し。境内は、露店、寄席など多く、楠公社内及び
三宮神社境内と共に賑かなる處とす。

眞光寺

所在は能福寺に接したる東逆瀬川町、大化元年僧法道の開基
本堂には阿彌陀、觀音、勢至の三尊を安置し、他に觀音堂、
開山堂、寺門の外蓮池には石橋架り、金銅の釋迦如來の像
を置く、眞光寺の如來と云ふものは是。

宗旨は時宗、しかも大檀林、その昔遊行上人の入寂したまひ
し舊蹟にして、市内に於ける有名なる古刹。境内に遊行柳あり、

り、什寶も亦多ければ、行手急がく旅人は請うて見るぞよき

清盛塚。琵琶塚

この二塚共に眞光寺の西に在り、進み行かば右に巨石建ち、
琵琶塚と刻みしを得べし。平經政の遺愛の琵琶を埋めたる標
なりとぞ。

清盛塚は、相對して右なる高處に建つ、十三層の石塔婆、高
さ二十六尺、臺石は方五尺、弘安九年二月北條貞時の建立に
して、僧圓實なるもの清盛の遺骨を携へ來り、此に埋めたる
蹟なりとか。兩三株の櫻は、今し四分の春色をもらし、一夜
の雨を経もせば、雪を欺くばかりに咲き亂れ、高き塔を埋め
ん風情やさしや。

巨石
おほいなる石

石塔婆
石の塔のこと

風情
おもむきあり
さま。

◎時序

(春) ○花の 旅

◎時序

標石
しるしの石。

工事
土木の事業即ち地理の土工

擧
しごき。工事を指す。

陰陽師
うらなひしや

(春) ○花の旅

築島寺。松王人柱の標石

之を兵庫島上町に尋ぬべし。この地を築島又は經島と云ひしが故に、寺を築島寺と俗稱するにて、其實は來迎寺と號する淨土宗の寺院、本堂に釋迦如來の畫像、平清盛鏡の御影等を安置す。別に觀音堂あり、觀音の像を置く。

松王人柱の標石は、本堂の前に在り。應保元年、平清盛この地を埋めて島とせんとし、民部重能をして工事を掌らしめぬ。偶この擧、海神の怒に觸れ、數回堤を築くも忽ち決潰して竣工に至らず。之を陽陰師に占はしめしに、人柱を沈めば容易にならんと。乃ち關を生田森に設け、旅人を捕ふ。讃岐の少年松王この事を聞き、進みて一身を犠牲に供し、衆に代り

一精舎
一字の寺院。

追福
死者の冥福を祈ることくや

託誼
神のおつけ。

當時
そのとき。

◎時序

(春) ○花の旅

長田神社

て海底に沈み、遂に工事をして成就せしむ。のち里人、松王が義に死せしを憐み、標石を建て、其靈を慰む。清盛も亦一精舎を建立し、松王の追福としぬ、築島寺は則ち是。

社格は官幣中社、祭神は事代主命。長田の森に鎮在す、神事としては正月の鬼追なり。詣づれば境内に多くの鶏の遊ぶを見る。蓋し、この神が鶏の音の聞ゆる里は、我が縁ある地ぞと、御託宣ありしが故に放ち飼ひせるなりとぞ。

前に夫婦池あり、堤側に平知章の碑を建つ。知章は知盛の子にして、源平合戦の當時一の谷にて討死せる若武者なり。從者盛物太郎頼賢の墓は、程近き處に弔ふべし。

◎時序

運河を開鑿
荷物を輸送す
る爲に作る河
なうがち作る
こと

壯麗嚴肅
リッパにして
おごそかなる
こと

崇敬
あがめたツ
ぶこと

(春)

○花の旅

二百十四

荊 藻 島

近年に得し名所の一、兵庫運河を開鑿したる時、その土沙を以て築きし小島、島上に山を作り、樹木を植ゑて自然にまさる風致を添ふ。試みに上れば、なかくに捨てがたき眺望、今は荊藻俱樂部を設け、一の遊園となる。

和神社。和田岬。和樂園

既にして境内に入る。本殿は八棟造にして壯麗嚴肅、社前に潮入の小江あり、橋あり架る、春水に吾が影映して渡れば、直に和田岬に至る。鎮座の地は兵庫の西端、和崎町三丁目社格は縣社、祭神は天御中主神、萬治二年武庫郡押照の宮、洪水の際神體こ、に漂着せしを、里人崇敬して社殿を營み以

◎時序

茶店酒棚
茶や酒を飲み
て休息するか
けみせ。

烟波渺渺
天水相接して
目も遙かなる
さま。

爾後
そのうち。今
より以後。

(春)

○花の旅

二百十五

て氏神となりたるもの。爾後、海上鎮守の神として舟人の日和を祈るもの多く、柏手の音絶ゆることなし。和田岬は、兵庫港の西南に突出する沙濱、前面は海を隔て、紀泉の遠山と相對し、烟波渺茫たる眺め容易に筆に上しがた、兵庫港に出入の帆影、雨に夕日にすてがたき景、神戸の汽船に比すれば詩にふさはし。岬頭には、圓形の舊砲臺及び不動赤色の燈臺あり。春より夏にかけては遊人多く、沙濱到處に茶店酒棚を設けて、客の休息に便するあり。

和樂園は、燈臺の西二町餘の處、一の遊園地にして海濱數萬坪を占め、園内には觀工場、生洲、茶店、酒亭を設け、長閑けき春の日に酔ふべく、涼風に暑忘る、に宜しく、秋晴の海

◎時序

四時の遊覽
春夏秋冬のけ
んぶつ。

外史
山陽が著作の
日本外史。

津妓
ふなつきの藝
妓ごの義。

鴉
鴉鳥の一種か
さご。

(春) ○花の 旅

二百十六

に白帆を送迎するにも宜しく、雪の眺めも亦よく、四時の遊覽人絶えず、別天地と云ふべき此處。本間孫四郎遠矢の跡は、園の西敷町とす。外史に記すらく、尊氏の兵艦、海を蔽ひて至る。而して直義、須磨より來る旌旗天に彌る。義貞、正成をして直義を拒がしめ、義助、氏明をして尊氏を拒がしめ、自ら其後に居る。相持して未だ戦はず。我が軍一騎あり、弓を挟みて岸に立ち呼びて曰く、將軍西より來る、必ず津妓を載せ、置酒高會せん。請ふ一物を進め酒を佐けん、と。箭を注ぎて埃つ。適鴉の魚を攫みて擧がるあり、乃ち馳せて之を射、其隻翼を斷ちて、敵の舟中に墜す。兩軍謹呼す。尊氏、人をして其名を

◎時序

香海
おほうみ。

一矢云云
一本の矢も大
事まりこの義

箭
やがら。矢の
幹。

刺を投せん
名札を差上げ
んごの義。

和 田 小 松 原

問はしむ。答へて曰く、東人或は識らん。請ふ刺を投せん。と。復一箭を放つ。三百歩を軼ぎ、船舷を貫く。尊氏其箭を視れば、箭に彫りて曰く、相摸の人本間資氏と。敵中傳へ觀る。資氏、扇を揚げて呼びて曰く、方に今戰國なり、一矢愛むべし。返賜せよと。賊中答射する者あり。箭岸に達せず。我が軍齊しく笑ふ。云云。

(春) ○花の 旅 (水都の春)

二百十七

東は兵庫の町外より西は東池尻にて一面の松原なりしとぞ。往昔は南に蒼海を控へ、遠く淡路島を望む。波上に往來の白帆、蘆間に鳴く千鳥など、一として詩料ならぬは無かりしに近時は多く田園又は宅地となり、僅かに一簇の松林を餘すに

◎時序

行宮
かりみや。

最先
まっさき。

好事者
ものずきのひ

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百十八

過ぎす。又、内裏址は築地の跡なほ残り。字を水の子と云ふ。安徳天皇治承四年六月、福原の新都に還幸あり。初めは池大納言頼盛の山莊を行宮とし給ひ、同月九日此皇居に遷り給ひしこと、平家物語にも見ゆ。

附記す、神戸に於て記したきものは、福原内裏址の事を最先に、其當時に係る古跡多き中にも、萱御所跡は兵庫南逆瀬川町舊井上倉庫の附近なるべき乎。その門内稻荷社の前には萱御所跡及び碑銘、須佐乃入江、和田笠松、東濱等の碑石を一所に集めて、すぎし昔の名残を留む。好事者は就て訪ふべし。尙、幾代目かの笠松と云ふは倉庫の裏門外に、行末榮ふべき稚松あり。

水 都 の 春

水都
水のみやこお
ほさか。

萬頃
ひろき事を云
ふ。

盛況
さかんなる景
氣。

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百十九

一日と思ひし神戸に二日を費し、春にゆかりなき古蹟を旅の序にと探り、今し投じたる大阪行の電車、棚引く霞を縫ひつ、北方一帯の連山を左に、南方萬頃の碧海を右に、晝中に進むも心地よく、松の梢越に見る白帆殊に面白く、瞬くひまに八九里を後に、午前十時と云ふに梅田には着きぬ。

いつとはなしに水の都と呼べる、大阪、淀の荷船が旅客を送りし昔より、安治川口に出船千艘入船千艘の盛況を謡はれし當時より、二千餘萬金の黄金を埋めて作りし築港の今日まで

◎時序

幅員
はひろさ。

汪洋
水のなみ／＼
さ流るゝ形容

騰脂
騰脂に同じべ

(春) ○花の 旅 (水都の春)

二百二十

浪速の富は水にあり、浪速の誇りは水にありたりき。
見よや、水の都の大阪市は、東西約二里、南北約二里半、戸
敷二十一萬餘、幅員百三十間の傳法川より、四間に足らぬ東
大井路川に至るまで大小三十八の水路、汪洋として市内を縦
横に貫流す、此延長實に七十九里餘、之に架する大小の橋梁
二百四十二臺、其最も名高きは天神橋、天満橋、南北に相接
して架せる浪花橋、元標の立てる高麗橋、十字に流れし水に
架したる四ツ橋は、電車通じて以來二橋變じて舊の井字形を
損し、大阪に於ける釣橋の元祖たりし心齋橋は、美しくも磨
ぎ出されし石橋に架けかへられ、北の新地の色町に騰脂漲ら
せたる蜷川は、彼の大火後に埋められ、きぬんの別を送れ

細腰
柳のなま／＼
したる形容。

交通機關
往復又は運搬
に屬する機關
道路鐵道、郵
便電信など。

起點
はじまりの個
所。おこり。

◎時序

(春) ○花の 旅 (水都の春)

二百二十一

る蜷川の柳は、細腰を東風に弄したるも今は夢、橋と共に影
なく、曾根崎橋も優しき名の櫻橋も亦なし。
今し吾が一步を入れし大阪は、日本第一の商業地、又工業地
これに相伴ふ交通機關の主なるものは、日々に出入する千百
の船舶は云ふにや及ぶ。鐵道は東北より來る東海線に北に向
ふ阪鶴線、築港に馳する西成線、東南に城を繞れる城東線、
電鐵は阪神線、箕面線、市内線、共に城北の梅田に於てす。
市の東部北邊の網島には關西線と、天満橋の南詰には京阪電
鐵、南には南海鐵道、湊町の關西線は天王寺にて城東線と相
合し、天下茶屋にも至るを得べく、高野鐵道は振はぬながら
も、起點を幸町の潮見橋にするがあり、こは湊町の西なり

◎時序

火災云云
明治四十二年
の火事を好機
會さしての義

斜ならず
おほかたなら
ず。

北陽
北の新地を云
ふ。

(春) ○花の旅 (水部の春)

二百二十二

中之島公園。浪花橋

火災を機として改良せし梅田附近、舊一倍の繁華、電車には常に満載する春の人、多くの詩人は俗と嘲ればとて、田舎出の吾には珍しく、南して訪ひしは中之島公園地、小松疎に白楊交れる邊には、すでに櫻花咲きそめたる憐れさ、十丈高き太閤の像は、朝日浴びて仰ぎたり。相接して圖書館、公會堂其北岸に銀水樓、豊公神社に詣づるあたり花殊に多く、社の側には名高き白玉稻荷社あり、小さき朱の鳥居潜りて賽すべく、靈驗斜ならずとて吉凶を神籤に問ふもの多く、中にも北陽の妓、春の朝夕を運ぶ伽羅下駄に塵をあぐるぞもの絶えず東して北に聳ゆる巨館は大阪ホテル、相接するは銀行集會所

◎時序

老俠
年老いし俠客
との義。

橋の袂には
はしづめには

書舫
うつくしき屋
形船。

(春) ○花の旅 (水部の春)

二百二十三

なり。大なる石の鳥居の北岸には軍馬を祭れる金銅の馬の像相並びて木村長門守重成表忠碑あり。書は日下部鳴鶴、建立は時の府知事西村醉處と老俠小林佐兵衛の二氏なり。東に向つて盡くる所は即ち劍先、澱水は此處にて南北に分流し、此處を橋臺に二橋架す。南は北濱に北は樋上町に通ず。總長九十七間、幅四間餘、南流の土佐堀川に架するを浪花橋、北流の堂島川に架するを難波橋と書すれど、共になにはばしとぞ呼ぶ。橋の袂には、兩三株の楊柳幾多の春景色を添へ、兩岸には高低として聳ゆる樓閣、雨に珠簾垂れ、月には珠簾を捲く風流限りなく、長江水緑に書舫往來し、昔浪花橋と共に三大橋と謠はれし天神天満の二橋は、烟靄模糊の中に隠見し、

◎用序

雲表
くものうへ半
空。雲外。

展云云
散步する人との
義。

奇観
めづらしき
もの。

(看) C花の旅 (水都の春)

二百二十四

京橋町のはてには古城雲表に聳ね、青松粉壁、うた、豊公の
覇業を追懐せしむ。此處、老樹に乏しければ幽邃の趣なけれ
ど、晩春には藤に眼を洗ふべく、夏の納涼は第一の誇り、三
伏の夕は展を川風に移す人と、浪花橋の上流に舟を泛ぶる人
多く、其賑ひ言ふばかりなし。世に大川の納涼とは是。

天満 天神

社格は府社、菅原道實を祭り、蛭子、猿田彦。手力雄の諸神
及び野見宿禰を合祀す。例祭は七月二十五日、世に鉾流しの
神事と呼び、大阪第一の奇観、また我國三大祭の一とて名高
し。梅田より電車にて直に賽すべく、天神橋より北三町、大
工町に鎮り在す。境内は廣からざれども、梅と櫻の五六株春

松秀云云
松のみどりき
はだちて見ゆ
るそのしたに
は。

髻髻
さもにたりよ
く似て居るさ
の義。

長蛇云云
橋の形容。

洋々
水のゆたかに
流るゝ形容。

◎時序

を飾るもあり、松秀づる下には鶴を放ち鷺を飼ひ、裏手には
攝社末社多く建ち並び、碑石も筆塚もあり。春も夏も秋も冬
も柏手の音絶ゆることなく、露店の多き、裏門外に劇場、人
寄席、飲食店のさま、神戸なる楠公社内に髻髻たり。中にも
稻荷餅は名高く、龜の池には春の日に背をほす龜多く、子守
娘日々に群を成す。

天神橋。天満橋。八軒家

天神橋は浪花橋の上に横ふ。長さ百三十一間、幅六間、長蛇
の江に飲むが如く、東は天満橋を隔て、網島、古城の青松と
白聖を天際に望み、西は中之島を縦に、其右には堂島川、左
には土佐堀川、洋々として流る、春水緑に、ほのくゝと明け

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百二十五

◎見序

蔬菜
あなもののや
さい。

童謡
はやりうた。

京街道
京都へ行く道

(春) ○花の旅 (水都の春)

そむる曙の景色殊に宜し。

天満橋は長さ百十七間、幅六間、天神橋の上に架す。二橋の間の南岸は八軒家、北岸は青物市場にして、時ならぬ蔬菜に人を驚す、彼の

寝んねころ市天満の市よ、大根揃へて船に積むと、童謡に囃さる、は此市の賑ひなり。市の側なる初真桑、割つて冷して冷やりと、瓜を二つに打ち割れば似たりや似たり燕子花

なご浄瑠璃の一節ともなりて名高く、其裏町には乾物店、魚市場もあり、橋の南部七分通の處、西に突出したる地を備前島と云ひ、北は網島にして京橋よりは京街道、左すれば浪花

市營
大阪市の營業
なること。

交通自在
ゆきいが自由
自在なること

偲ぶ
むかしを思ふ
その義。

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の春)

唯一の花の名所、櫻の宮に達すべし。北詰を東すれば造幣局南詰の東には京阪電車發着するがあり、市營電鐵は、梅田よりして天王寺に達するものも、西すれば北濱を経て梅田より西線に合すべく、交通自在なり。

八軒家は、京橋通三町目の舊稱、淀川通ひの汽船と市内の川どに往來する巡航汽船の乗場、浄瑠璃に、數も限らぬ家々を、如何に名づけて八軒家、誰と伏水の下り船、

なご云へるは此處、昔は三十石にて伏水に上り下りしたるが今はそれを偲ぶ人有りや無しや。吾は固より赤ゲットの一人、宿をも此に求めたり、維新前のさまをも枕に上しぬ。

◎時序

漁火
漁船にたく火
いさりび。

紅塵
世の塵。俗塵。

沿岸
かはぞひ。

(春) ○花の旅(水都の春)

築地

此處、一に蟹島と稱し、漁火は浪花八景の一に數へられ。北は直に澱川の碧流に臨み、東は斜に天神天満の二橋に對し、西北は浪花橋を低く眺め、紅塵しげき市内に占むる風光明媚の一區、酒樓多き中にも竹式最も景に富めば、雅人は多景色と字面を雅にす。樓下を南に流る、は東横堀川、先づ今橋架り、次に高麗橋あり、水の行末は西に折れて道頓堀なり。今し電車通す。東すれば八軒家を経て天満橋、西すれば北濱沿岸を經、浪花橋の南詰を過ぎ、公園の西端なる淀屋橋を北に見、梅田よりの線に合すべし。

高麗橋並に其由來

鴻臚
外國の來賓の
の職名。又その
へば外國の來
賓を接待する
爲に都下館に
けられし館舎

嚆矢
はじまり物事
の開始。

◎時序

(春) ○花の旅(水都の春)

博物館。錦繡堂

仁德帝の高津の宮に御代しろしめす御時、此橋の東に鴻臚館と云ふがありたり、今の高麗橋郵便局の地は其跡に當るとかや。當時高麗人の來朝する毎に、此館に宿りければ、橋に高麗の名を呼ぶに至りしとぞ。されば大阪市中に於て最古の橋にして、以前は高欄の制なりしを、明治三年九月鐵橋に改造す。長さ三十九間餘、幅四間餘、市内に於ける鐵橋の嚆矢なり。東詰に里程元標あり、一株の垂柳長へにそを護す。

◎時序

斯道

このみち。此處にては書畫の學問。

きらびやか
美しきこは

縞衣朱冠

白羽丹頂を云ふ。

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十

門の正面に美術館あり、今し春季美術展覧會開かれ、名家の手に成れる古今の書畫、すき間もなく掲げられたるに、斯道に暗き吾れ、何とはなしに心目を清うしぬ。

南方は庭のたゞすまひ麗しく、常盤木にまじれる櫻花のちらほら、人を導きて動物園に入る。大なる鐵の網張れる中には水禽の羽ばたき、小鳥の囀り春の日長閑に、輪になりて圍む小供の群、手引く親や姉妹も春を誇りの衣服きらびやかなり象の眠たき目つきするが有れば、虎や豹の潤歩して檻の中に勇を示すも有り、鹿や熊や猿や狐狸、小供の友は數知らず、止まれば則ち雲を飲め、飛べば則ち霞を散するてふ孔雀、青苔を啄む縞衣朱冠の鶴、能く人の語を成す鸚鵡の眸清しく耳

眞の能
眞實のうてま

行啓

皇太后、皇后、東宮の御みゆきを云ふ。

清楚

さツぱり。

茶寮

茶室のいこ。

◎時序

(春)

○花の 旅(水都の春)

二百三十一

大阪城址並歴史

聴き、金眸にして玉爪の鷹、何れも籠に在りて其眞の能をあらはすを得ざれど、處々に自由に鳴く鶯は、吾と同じく梅咲く頃に谷の戸を出で、浪花の都に旅試みるにや。錦繡堂は、明治二十三年 皇后陛下舞子へ行啓の途次、に御休憩あらせられたり。堂は僅かに數間、清楚優美なり。扁額錦繡堂の三字は、故三條内府の筆、別に西村醉處翁の記あり。又、園内には茶寮、能樂堂、集會の宴席等もあり。只惜むべきは博物の實なく、近年は徒らに一區の遊園めき、夏の夜ごと、納涼淨瑠璃などを催し、通券料の多額に上るを喜ぶが如き、たしかに厭べき事ぞと、或人は語りき。

◎時序

偉観
めづらしきみ
もの。

末路
なれのはて生
涯のはて。

方約
四方がおよそ

北郭
きたのくるわ

(春) ○花の旅(水都の春)

二百三十二

天王寺の塔と共に南北の偉観たる大阪城、地は舊の石山本願寺址と云へども定かならず。博物場のすぐ南、内本町を東に上りつめ、之を東北に仰ぐべし。大手町通よりし亦東に進みて得、京橋よりは南に上りて此に達すべし。年古る松の數多く、春風緩う梢を渡るも、豊臣氏末路の事に想ひ到れば、小琴の聲として聞かれず、何ぞ一に悲しき。空高く歌ふ揚雲雀の曲も、徒らに懷古の念を深うするぞかし。現に存する城址は周圍一里餘、方約九町、本丸二の丸の二郭に區分せられ、外郭は即ち三の丸、凡そ内外東西二十町餘、南北十八町餘、本丸は第四師團の司令部となり、北郭青屋口は砲兵工廠に、三の丸追手口、玉造口の外邊、みな兵營練兵

◎時序

畿甸
畿内と云ふに
同じ。

東軍
徳川方を云ふ

濠渠
ほりを云ふ。

粗
おほよそ。た
いてい。

(春) ○花の旅(水都の春)

二百三十三

場等に供せられ、畿甸の雄鎮たること猶昔に異ならず。城は豊臣秀吉の築く所、天正八年に工を起し、天下の諸侯を役し、十一年に成る。其子秀頼に至りて益堅固となり、慶長十九年十一月、秀頼據守して東軍を防ぐ。若し夫れ當時の結構を語らんか、本丸は表に櫻門、裏門筋に鐵門ありて濠渠之を繞る。二の丸は正西門を追手口、東南門を玉造口、其北に在るを青屋口、西北にあるを京橋口とし、現に尙存す。三の丸は西に濠渠あり、今の東横堀にして今橋以下の九橋架す此堀よ、南は今の道頓堀より木津川に及びたること、粗今日に同じと想像さる。南にも堀ありき、今僅かに空堀の名を存す。九之助橋邊より東、斜に猫間川に至れるものは是。其

◎時序

樓櫓牆壁
やぐらやかき

宏壯堅固

廣大にして破
れがたきこと

牙城

本丸を云ふ。

後を絶つ

家名の断絶す
ること。

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十四

間には松屋町口、谷町口、八丁目口、平野口等ありて、何れも樓櫓牆壁を設けられたり。又、平野口の西に眞田丸の山城ありき。東は猫間川を限り、其間には黒門口、大和橋口、森村口あり。北には天満川を自然の濠とし、天満天神の二大橋架し今の鯉江川には京橋あり、宏壯堅固、實に天下第一たり。冬役に和議なるや、老獯なる徳川氏は條件を質に其外濠を埋め、櫓樓牆壁を毀ち、依然たるものは牙城のみ、流石の名城も一朝に堅固を失ひ、また據守すべくもあらず。翌元和元年四月、兵を擧げて恢復せんと圖りし際は、只郊外に戦鬪線を張るのみにて、守城をなさすに由なく、五月終に落城し、あはれや豊臣氏後を絶つ、是を所謂夏の役なりき。

尋で

程もなく。ひ
きついで。

勳舊云云

元老の大名。

雷震

かみなりにう
たること。

雷火

落雷の爲に起
る火災。

◎時序

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十五

落城後は松平忠明に守らしめ、尋で之を賜ひ、十萬石を給す。忠明荒廢を修し、市邑を治し、數年にして繁華舊に復しぬ。のち徳川氏忠明を他に移し、大阪を以て鎮府とし、城代を置きて之を守らしめ、勳舊の諸侯之に任せられき。又別に加番を置き、市政は町奉行二人を置き之を監視す。又城郭殿舎は元和六年諸侯に課し、數年を経て竣功す。萬治三年、青屋口火藥庫雷震し、城内焼く。寛文五年、天守閣雷火に遇ふ。天保十四年に殿舎諸門を修理す。戊辰正月七日、徳川慶喜大坂に入り、急に東に走れり。九日、城中火を失し、樓屋みな焼盡す。十一日、官軍城中に入り、幕兵悉く散亡す。維新の後鎮臺を本城に置き、のち改めて師團となりて今日に至る。

◎時序

四顧の雲烟
よもやまの景
色さの義。

史
歴史を云ふ。

大阪の役
豊臣氏が徳川
に對しての合
戦を云ふ。

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十六

城内 觀覽は、初夏の招魂祭日に許す由に聞きしも、時早ければ天守閣上の人となりて、四顧の雲烟を縦にし、全市に運ぶ上水池も見るを得ず、空しく石壁の下に湛ふる濠の水に對し、無限の感慨を深うし、今はと歩を南に移しぬ。當時の戦況も語りたけれど、そは既に史に精しく、限りあるの旅日記豊臣氏の歴史繰返す餘白に乏しければ止みにき。

宰相山

俗に眞田山と云ふは此處。大阪の役、眞田幸村こ、に砦を構へたるよりの名とぞ。地は玉造町の西に位する一小丘、東に嶺山稻荷社あり、俗に眞田山の稻荷と呼ぶ。本社に 仁徳天皇を祀り、側の小祠に倉稻魂命を祀る。末社三光の宮は

◎時序

逆
順の對。さか

朝ぼらけ
夜の明くるさ
き。あけがた。

平楚
廣き野原。平

賽者
さんけいする
人。

豐津神社(玉造稻荷)

奥州青森に在す神の遙拜所と云ふ。此神よ、中風の病難を除かせ給うと稱し、賽者多し。其宰相山との本名は、京極宰相の陣營ありしが故の稱と言ひ傳ふ。丘上より見渡せば、東に生駒、暗嶺、信貴、金剛の諸峰巒、平楚を隔て、曲々と相隣わ、菜花の眺め殊によし。碑あり、雉子なくや宰相山の朝ぼらけ、この十七字詩を刻す。此山、陸軍省の所轄に屬す。

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十七

◎時序

勸請
離れたる土地
の神佛の靈に
移して祭るこ
と。

餘風
其當時のさま
遺風。

縹緲
かすかに引き
はねたるさま

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十八

玉造江の古歌あり。垂仁天皇の十八年、倉稻魂命を勸請し、
豊津神社と云ふ、社格は郷社。本社の後に舞臺あり、東方の
連山を望み、菜花の勝に富むこと、宰相山に劣らず。

高津神社、自性院

湯豆腐屋
吉助牡丹

仁徳天皇を祭れる府社、境内の西端に舞臺あり、往古の高臺
の皇居の餘風を模せり。暫し欄に凭りて見渡せば、近くは道
頓堀の橋々、五座の劇場の一端、春風にひらめく最負幟のか
す、碧瓦鱗次する中にも南北兩御堂はそれと指點すべく
霞む西のはてには天保山、安治川口にかすかに見ゆる出船入
船、最も遙けき摩耶、武庫、六甲の諸山は夢の如、縹緲とし
て春を眠るの風情、一眸に收むるを得。北は市の盡くるを見

餘澤
名残の恩恵。

遺愛
生前に愛した
るもの。

あらたか
神佛の靈験の
いちじるしき
さまに云ふ。
赫灼。

◎時序

窮め難く、民の窳の賑ひに 御製のむかしいと偲ばれ、餘澤
今日に及ぶかしこさ、記するに筆ぞなき。一音の句に、
憂こし若葉や越て西の海

境内に遺愛の梅樹なるを栽うれど、咲くや此花と歌はれし花
は、梅にはあらで櫻なること既に争はれず。事ある毎に大阪
市の章に、櫻花を用ふるに至りしも、之に因めるとかや。高
臺之頌碑は、繪馬堂の南に在り。この社、もと産湯稻荷の鎮
座地、比賣古曾神社の境内に草創せしを、天正十一年本地に
遷座し、比賣古曾神社をも亦同時に此に移されてあり。
靈験あらたかなりとて、賽人多き高倉稻荷祠は、本殿の東側
に在り。表門を下れば名ばかりの梅の川あり、架れる小石橋

(春) ○花の 旅(水都の春)

二百三十九

◎時序

女性
女子と云ふ義

絡繹
續きて絶わぬ
さま。陸續。

窈然
おと深きさま

(春) ○花の 旅(水部の春)

二百四十

を楠之橋と云ふ。千代の句に、
鶯はともあれこ、の初音かな
と、名を掩ふとも女性の詩たるを知らる。側に自性院あり、
境内に三十三所の観音あれば、毎月二十一日の大師廻には賽
者絡繹として、香烟絶わやらず。
湯豆腐屋は、石階の西側に在り、豆腐の風味に舌打ち、手輕
く一醉買はれしは昔の事、今は界限にて名高き料理店、座に
就けば千年の古本小暗く欄を掩ひ、樓下は窈然たる深谷のさ
まして幽邃、市内には他に類なきの境。
舞臺の北なる裏阪を下れば、黒焼屋二軒あり、共に元祖との
看板掲げて無言の中に舊家争ひ、とも角大阪名物の一として

◎時序

さすがに
名高き程あり
ての義。

屈指の園
二三を争ふ名
園との義。

盆栽
はちうゑ。又
その花卉。

算へられ、近くは人骨事件に名をあげたり。
吉助牡丹は、黒焼屋の東隣、高津神社の石垣に沿うて門を設
く。此處、牡丹花にて名高き植木屋、他の盆栽も市内屈指の
園にて、紅塵到らざるの幽境、其上は樹木生ひ茂りて深山の
さまを成す。仰げば樹色濃翠を滴し、春雲流る。園は恰も
湯豆腐屋の下に當る。

生國魂神社

高津神社の下、松屋町通を南に、二ツ井戸を西すれば道
頓堀に行くべしと教へられしを、尙も南に進みて右に上
る源聖寺阪、隆專寺の絲櫻を訪ひぬ。花は盛り過ぎたる
も未だ葉にはならず、さすがに眺め床しく、行手の左右

(春)

○花の 旅(水部の春)

二百四十一

秋の東籬
秋の時節に
なりの菊花
の義。

◎時序

莊嚴
リツげなるこ
こ。

茶棚
茶店を云ふ。

風に
早くよりこの
義。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百四十二

に蔓並ぶる寺々には、櫻を栽うるもの多く、半開や八分の花に旅の疲れを慰めつ、高津の菊畑は此處なるかご秋の東籬の黄金銀を心に描き、辿り着きしが生國魂神社なりける。

社格は官幣大社、生國神、足國神を祭り、永祿元年大物主命を合祀す、社殿の莊嚴申すも恐れ多し。社門の東には、左右に蓮池ありて賽路を擁し、池中には辨天祠を建つ。其南に北向八幡宮あり、祭神は應神天皇、天正年間の創建。裏門を眞言阪と云ひ、下れば下寺町に出づ。

社頭には櫻樹多く、今し七八分の開花、雪のこぼれさうなる其下には茶棚數多並び、就て憩ふべし。生玉の夜櫻とて、風

名を馳す
世に知られて
居るこの義。

雲烟糊模際
天のはてにか
すかに。

草創
はじめて造る
こと。又はじ
め。

◎時序

に名を馳す。本社の後に舞臺あり、見渡せば大阪全市は云ふまでもなく、安治川口、木津川口の征帆をも之を掌上に弄すべく、遠くは西攝一帶の峰巒、淡路島山をも雲烟糊模の際に認むるなど、高津の眺めに比すれば、更に詩膽を大にす、空霞む春にして猶然り、心ゆくまで晴れし秋の日には、其眼千里の外にも及ぶべし。

當社創建の年月不詳、一説に 應神天皇の三年古の難波崎に草創し、明應四年蓮如上人本願寺御堂の傍、即ち今の大阪城地に遷座す。天正年間織田信長本願寺と戦ふとき、本社も亦兵火に罹りて焼失し、同じく十一年僅かに神璽を鎮めて今の地に營み、のち秀吉、片桐且元に奉行せしめ、殿宇を再建

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百四十三

◎時序

(春) ○花の 旅 (水部の春)
し、以て現時に至れるものとぞ。

二百四十四

圓 珠 庵

阿闍梨
又アザリと訓す。僧の官名。又師の官稱。なるべき僧の

舊居
もこのすまひ

古雅
古風にして俗ならぬこと。

此庵、契冲阿闍梨の遺蹟、門に入りたる處に墓碑あり、文は五井蘭洲の撰なり。之を餌差町に訪ふべし。阿闍梨は國學中興の祖、著すに和書數篇あり。元祿十四年正月二十五日此に寂す、年六十二。庵は、阿闍梨が河内の舊居に移せしものと云ひ、構造古雅、屋後に梅の老樹あり、遺愛のものとして名高く、常に相訪ふもの多し。
産湯清水。同稻荷。味原池。
桃山の花。
産湯の清水は、小橋に在り、大小橋命の産湯の水と稱し、清

滾々
流れて盡きぬ形容。

小酌
こさかしり。淺酌。

叩
訪ふ。たづねる。

絳霞
あかさかすみ。桃花の形容。

◎時序

泉滾々として涌出し、四時涸る、ことなし。この名泉の傍に丘あり、法藏山と云ひ、古の比賣古曾神社の舊地とぞ。今、こ、に稻荷祠あり、産湯の稻荷と云ふは是。産湯樓と云ふは見晴しよき一の旗亭、小酌の雅俗絶えず、之を稻荷の側に叩くべし。
味原池は産湯の北に春波を湛ふ。一に比賣古曾の御影池とも呼ぶ。太古、此邊を味原の郷と稱せりとかや。池畔に、仁徳天皇高津宮舊址碑あり、玉垣を遠し、桃と櫻とを栽て碑を護す。桃山とは此附近の稱にして、古來桃の名所、花時には雅俗雜沓、絳霞棚引く中に鶏犬ならぬ醉歌の聲聞ゆしも、今は人家建ち並び、兩三株の花に、往事を偲ぶに過ぎず。

◎花の 旅 (水部の春)

二百四十五

◎時序

梅莊
梅やしき。

佳人
梅のこころを指す。

靜幽
靜かにして俗氣なきこころ。

(春) ○花の旅 (水都の春)

梅屋敷。新梅屋敷

生國魂神社の東數町、之を上本町七丁目電車停留所よりすべ
きも、今は名のみなるぞ口惜し。二十年前は新舊の梅莊相接
し、まだ東風寒き二月の空、黄昏の月に佳人を竹外に訪ふに
宜しかりしも、市の發展と共に年々に俗化し、建ち並びし人
家の處々に、一二の古梅を存するのみ。

紅葉寺

紅葉寺とは、蓋し寶樹寺の俗稱、庭は碧苔深うして靜幽、楓
の大樹幾株ともなく空を掩ひ、霜降る晩秋の頃に至るも紅葉
するものは稀なれども、春の青葉殊に賞すべく、亦是れ城南
の一勝地。境内には、淨瑠璃作者紀の海音の墓あり。訪ふに

淨刹
お寺を云ふ。

平蕪
廣き野原の、
さし平楚。

崇敬云云
信仰深かりし
寺の義。

觀を云云
もこの有様に
なりたりとの
義。

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の春)

は上本町九丁目停留所に電車を降るべく、辨天池の上に青楓
茂り、寺樓の一角を東南に見るは即ち此淨刹。北に平蕪を帶
び、東山の翠に對す。南に歩すれば、直に天王寺境内に入る
天王寺 (一に四天王寺)

當山は浪花第一の古刹、荒陵山敬田院と號す。聖德太子の創
建に係る天台宗、歴代崇敬斜ならざる寶刹なり。初め用明
天皇の二年玉造岸に建て、推古天皇の元年荒陵の東に移
す即ち本地なり。

堂塔は創建の後、數度の改修を経、享和元年雷火に罹り、金
堂以下四十餘宇焼亡す、文化九年大阪の紙屑商淡路屋某重
興して漸く觀を往日に復したりと云ふ。

◎時序

兵家必爭
地の形勢勝れ
たれば戦争に
たづさはる人
の取りて據ら
んとするこの
義。

石華表
石のさりぬ。

廻廊
まはり廊下。

(春) ○花の 旅 (水都の春)

抑も本堂は、一千三百餘年の舊蹟にして、しかも要害、兵家必争の點に當るを以て、戦亂の災を被ること營に一再ならず然れども太子所遺の七星劍一口、手印本願縁起一卷、扇面法華經一帖今に尙存するを貴し。
四大門は、西大門を追手とす、門前に石華表あり、釋迦如來轉法輪所當極樂土東門中心てふ額を掲ぐ、聖德太子の筆なりとも、或は小野道風、又は弘法大師の筆なりとも云ふ。曉鐘成翁の説によれば、三井長吏慶暹が弟子慶耀、勅を奉じて書せるなりとも云ふ。暫く聞くがま、を斯く。華表の傍には法華堂、念佛堂あり。門内には五智光院、經藏あり。南大門は廻廊二王門の南にして、傍に萬燈院、その南に太子堂あり、

圍遶
四方をめぐる
くこと。さり巻
くこと。

寶鐸云云
寶は敬稱。大
鈴が四方の檐
に掛りてある
こと。

觀るべし
立派なりとの
義。

◎時序

(春) ○花の 旅 (水都の春)

聖德太子を祀れり。
廻廊は中央に在り、延長百五十間、大塔、金堂、講堂の三字を圍遶す。西重門は即ち西門たり。金堂は桁行十間、梁間八間、本尊は如意輪像、東壇四天王を安置す、皆西面せり。半空に涌出す大塔は、其南に聳わて五層、寶鐸四檐に懸りて人語は半空に聞ゆ。高さ十四丈七尺、本尊は釋迦佛なり。仁王門は更に大塔の南に聳わ、講堂は金堂の北に、無常院は鐘樓にして六時堂の前に在り。寺域約二萬五千坪、大小の堂舎四十餘宇、皆觀るべし。尙、前に書き漏したるものには、太子堂の前なる猫門、左甚五郎の手に成りたる猫を置くが故の名龜の遊ぶ萬代池、其他一々擧ぐべくも有らず。大釣鐘は十餘

◎時序

歩を云云
遊ぶ人が少な
かりしこの義

長へに
永久に。この
さには。千萬
年もこの義。

大阪の役
大阪城に於け
る秀頼と家康
との合戦。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十

年前に、聖徳會の鑄造に係れるもの。
此寺の境内、二十餘年前は極めて淋しく、萩の名所と云へば
とて、歩を運ぶ人も稀なりしに、今は茶店酒閣高低と相接し
宛然たる市街を成し、老樹に交へて植ゑられし櫻は數多にて
蕾破りし花は香雲を棚引かし、長へに寶刹を護す。賽人の雜
沓は春秋二季、彼岸會、八月の千日詣でなり。

茶臼山。雲水。庚申堂

茶臼山は一名を勝山と云ひ、之を天王寺の南に訪ふべし。大
阪の役、徳川家康に、陣營を置きし所とて名高し。地は松
樹など茂れる小丘にして、四面に濠を遶らせり。天王寺の雜
沓より來し吾は、深山に入りし心地す。

◎時序

禪刹
禪宗の寺のこ
と。

鳴る
名高しこの義

人間
この世。せけ
ん。

骨子
結構の中心。
趣向の主眼。

一 心 寺

山の東南に邦福寺と云ふ禪刹あり。俗に雲水と稱し、幽雅の
境を以て鳴る。乞ふに任せて精進料理を出す、なか／＼に趣
味多く、妓を携へて訪ふ風流人さへあり、人間の別天地なり
。庚申塚は程近し、本尊は青面金剛、庚申の日に參詣する人多
し。此日、頭痛のまじなひなりとて、境内にて庚申昆布を賣
る。彼の近松門左衛門の『心中宵庚申』紀海音の『心中二ツ
腹帯』などの骨子となれる、わ千代半兵衛夫婦が情死を遂げ
しは此處。

疲れし足を再び北へ返し、天王寺西門より夕日向ひて下り
之を逢坂の南に得たり。浄土宗の一名刹、もと天王寺の別所

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十一

◎時序

參州
三河國を云ふ

殿材
御殿の材木。

瞥見云云
一寸見る事が
出来ることなり

懸崖
がけ。きりき
し。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十二

にして、源空の庵室たり。慶長中、參州の僧本譽存岸再興して一心寺と號せし由。大阪冬の役には、徳川家康陣を此に置きぬ。戦後、大阪城の殿材を給附し、寺宇を重修せしむ。其前門は、玉造口黒門を移したるものぞ。本堂には、毘首羯摩の作なる、長三尺の阿彌陀佛を安置す。二階堂、三千佛堂御影堂みな境内に在り。又、大阪役に討死したる東軍の將本多出雲守忠朝墓、八代目團十郎墓あり、電車中よりも之を瞥見し得るなり。

新清水寺

此寺、懸崖によりて堂宇を建て、西と北との二方に峻しき石階を設けて賽路とす。之を一心寺より更に北して訪ひたり。

本尊
寺院にて主尊
す。佛像。ほぞ
ん。

歴々云云
ありノハと書
の如く見らる
ゝの義。

一帯の丘陵
か。ひさすちのな

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十三

本尊は聖徳太子作の十一面觀世音、もと京都の音羽山清水寺に在りしを、寛永十七年當寺に遷せるもの、故に此寺號あるにて、前面に架けし舞臺も亦京都に模りたるもの乎。瀧あり音羽瀧と呼び、阪あり、紅葉阪と稱す。舞臺に立てば、夕日に暈し出されし大阪市の南部、歴々書に入り、今朝の高津に比すれば一しほの眺め、去り難き心地す。南に接したる酒樓は八百松なり。そを隔てし南の松の森は、安居天神鎮座の地北なる一帯の丘陵は、夕陽丘とて名高き勝地ぞや。吾は暫し休らひて歩を北に運びぬ。

夕陽丘

清水の北に得たる此處夕陽丘、源空庵日想觀の故事、家隆卿

◎時序

風致損云云
おもむきが
おもしろい
景色が
色なるが
景色が
色なるが
景色が

剝落
飾られし
飾られし
飾られし
飾られし
飾られし
飾られし

暗香疎影
梅花を云ふ。

(春) ○花の旅 (水部の春)

二百五十四

の夕陽庵址あるにより、此稱起る。丘の大部分は、高等女
校に占められ、風致損すること甚し。先づ得しは勝曼院、
愛染明王を祭る。二重の塔は剝落したるも、猶床しきところ
あり其北に幹のみ朽ち残れる松ありて、下に一つの塚あり、
二條家隆卿の墓と傳ふるは是。少し東すれば横の生垣あり、
内に故小松帯刀の墓あり。こ、を右に五六歩、豫て聞き居し
陸奥宗光伯の墓、及びその父伊達千廣翁の墓あり。墓の附近
には幾多の梅あり、花時の様を心に描けば、暗香疎影の景あ
りありと、何處よりか聞ゆる鶯聲、そゝろに詩興を動かしぬ
道頓堀。千日前
道頓堀は、むかし安井道頓翁の開鑿したるもの、故に此名あ

◎時序

二基
ふたつ云ふ
義

右に架す
右の方に
架す

劇場
しほあする建
築物

(春) ○花の旅 (水部の春)

二百五十五

るなり。余は松屋町筋を北し高津よりの路を再びし、二ツ井
戸より西に折れぬ。二ツ井戸は、名物の粟にこしを商ふ家多
し、本家と稱する軒下に二基の井戸あり、名を得る所以。既
に電燈輝く町を西へくと進みしに、日本橋ありて右に架す
北は堺筋に通じ、南すれば天王寺にも、天下茶屋を経ては堺
市までをも行かる、なり。
此橋渡らで西し、左に辨天座、朝日座、角座、中座、浪花座
を得、所謂五座の劇場にして、浪花座の西なる橋を戎橋と云
ふ。北は心齋橋筋、南すれば四五町にして南海鐵道の難波停
車場、尙も西すれば三四町に關西鐵道の湊町停車場あり、
此二驛共に電車自由に、東西南北に馳す。

◎時序

観客
芝居見物人。

現在は
只今は。目下
では。

刑場
しおきば。

劍呑
危しこの俗語
油断なり難き
こと。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十六

さらぬだに花に浮かる、人多き此頃、一しは春夜の景氣を添ふる此處、田舎者の吾目は殆どくらめく。飲食店や雜貨店の外、角行燈を掲げしは、芝居茶屋とか、観客を劇場に案内するが業なり。昔は四十七軒ありて、名さへ『いろは茶屋』と呼ばれし由なるも、現在は僅かに二十餘軒に過ぎず。千日前とは、太左衛門橋を直に南したる處。維新前は千日寺と云ふがありて、且つ刑場なりしより、墓石累々として横はり、千草にたく露いと、人の命のはかなきを見せしかど、追々に開けゆき、今は諸興行物の中心にして、近年殊に面目を改め、一々評しやうもなき建造物と其繁華、油断もせば懐中物を抜き取らる、劍呑なる場所ぞ。

◎時序

香客
さんげいする
客。賽人。

遊廓
いろまち。狭
斜。

筆頭に
筆はじめに第
一にの義。

西側に法善寺あり、本堂に阿彌陀佛を安置す。別に金毘羅宮の祠あり、自安寺の妙見宮と共に、靈驗著しとて香客常に絶わす。法善寺境内には、義童勘太郎、並木正三郎の墓、自安寺境内には、艶姿女舞衣によりて後の世に浮名流せる三勝半七の墓あり。少し東に入れば、名高き縁切榎もあるなり。道頓堀の北側は宗右衛門町、南側の裏手は阪町、難波新地等の遊廓、物言ふあやしき花ぞ多し。

九軒の夜櫻

九軒とは新町遊廓の一部分、今は新町北通に属す。妓樓の名あるは、廓文章に名高き吉田屋を筆頭に、神崎屋、茨木屋等十餘軒春を競ふ。前に名ばかりの小さき土手あり、櫻十數株

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十七

◎時序

千代
俳人加賀の千代を云ふ。

名花
よき花との義立派な櫻花。

沿革
うつりかはり變遷。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十八

を栽う。今し花咲き居れば雪洞に灯を入れて賑ひを添ふ、九軒の夜櫻なるものは是。西端の花下に、千代の句碑あり、だまされて来てまことなり初櫻。そも此花街の櫻は、近松門左衛門が櫻まで曲輪は夜のつとめかなと詠みしより名高くなりたるもの、當時は大木の名花のみありたるべきも、今は若木を移植したるものなり。此處、新町は寛政年間田圃を埋めて新に遊廓を開き、東西に大門、外に新門、不開門等ありし由、其沿革に就ても語るべきも多けれども、他日に譲りて今は略しぬ。
造幣局。泉布觀

◎時序

碧流に臨み
川の流に添ふ

弓状
ゆみなり。弓形。

津藩
藤堂公の藩。

觀
櫻又は關と云ふに同じ。

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百五十九

所在地は川崎町、淀川の碧流に臨み、網島を隔て、古城を青松の間に見、東北には櫻之宮あり、地域は南北二十町餘、弓状を成す。我邦唯一の貨幣鑄造所にして、洋風の大夏棟を建て並べ、最も壯觀を極む。工場には冶金、分析、鑄造部など整然として、金銀銅貨の鑄造、日々幾千萬と云ふを知らず。數多の烟筒黒烟を彌生の空に吐き、見るからに盛大を想はしむ。此處、もと津藩の藏屋敷にして、碧流に沿ふ堤には數百株の櫻樹を栽う、花時には日を擇びて、四民の縦覧を許す。北端に泉布觀あり、調度善美を盡したる建物にして、邸内亦櫻樹多く、水に臨みて眺め極めて佳なり。觀内には、曾て今上帝の入御あらせられし、玉座の跡あり。

◎時序

春眠云云
春の頃の眠り心地よきを云ふ。

士女
男女この義。

玉座
天子の御座。

敷島
巻烟草の名。

(春) ○花の旅 (水都の巻)

二百六十

春眠 曉を覺えずとか、疲れし目を開き足を伸ぶれば、八軒
家旅舎の紙窓明かに、既に七時過ぎなり。やがて旅荷を例に
よりて肩にかけ、人出稀なる中にと造幣局に向ひぬ。時刻の
來るを待ち、萬人に先んじて櫻花を見る。春は今し九分、枝
と云ふ枝、樹と云ふ樹、玉を綴り雪を漲らし、油流したる如
き淀川に沿ひ、北へくと進む。正午近くならば、押し寄す
る士女の雑沓に、花は塵にまみれて黄にならんも、今は雪よ
りも白く、眺めいと麗し。
小橋を渡りて泉布觀に入り、玉座の跡を拜し、暫し茶棚に
腰をろして四方の景色を弄し、敷島くゆらしつ、進み、吹く
烟の末を見やられれば、朝東風にゆらくと棚引きて消ゆるも

垂楊云云
柳の枝が橋の手すりをなづること。

新男爵
此頃男爵を授けられし人との義。

大徳
高徳の僧を云ふ。

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の巻)

二百六十一

長閑けし。北に出づれば橋あり、兩三株の垂楊欄を拂ひ、人を東に導く、今し渡らんとするは、是ぞ淀川橋。渡りて北すれば、櫻宮にして、南すれば網島に至るべく、此處に大長寺あり。

大長寺。鯉塚

大長寺は浄土宗、藤田新男爵の邸に接したりしが、黄金に任せて之を他に移し、今は自由に尋ねがたき男爵殿の邸内、もと境内に鯉塚ありたり、寺の什物に鯉の鱗あり、鱗に三巴の紋あり、大阪陣の時、討死したる何某の大将、この鯉に化して當時の大徳が夢に入り、佛縁に繋りたる紀念と傳ふ。彼の近松の淨瑠璃に、南無阿彌島の大長寺と云へりしは此寺にて

◎時序
香烟云云
供養の香焼く
烟がたのめを
云ふし賽人の
多きを云ふ。

行樂場
あそびば。

酒の陣云云
花見の酒席を
設くるを云ふ

珊瑚の鞭
美しく珊瑚珠
にて飾れる鞭

自轉香車
香は自轉車の
美稱として添
へし字。

興に於て
其のたのしみ
の點は。

◎時序

(春) ○花の旅 (水部の春) 二百六十二
紙屋治兵衛、紀の國屋小春の墓あり、手向の香烟常に絶ゆる
ことなかりしも、今は是も廢れしなり。地は所謂網島、酒樓
鮎宇は名高し。西すれば天満橋の南に出づべし。

櫻宮源八渡

櫻宮停車場に下れば三四町、淀川橋を渡れば青灣碑を左に
見直に櫻宮に達す。社格は郷社にして、天照皇太神を祀る
昔は櫻樹多かりしと云ふも、花極めて稀にさてはと驚かるれ
ご全市の士女が行樂場として唯一の地、東は信貴、生駒の連
山を煙霞の中に望み、近き田圃には麥浪打ち寄せ、菜花黄金
をしきつめ、芳草の上に酒の陣張りて眺むるによく、西は淀
川の水を隔て、斜に造幣局の花を見る、また棄てがたき景ぞ

日は既に午近うして次第に集ふ花見客、陸より船より引きも
きらず、柳枝を折りて珊瑚の鞭に代へ、肥馬を驅る公子はあ
らざれど、自轉香車に砂を蹴り、風きりて來る若紳士はあり
巡航船に飾る赤き白き旗共は俗なれど、珠簾垂れし書舫の紅
提灯は優しく、花下に棹して笛吹く風流男は稀なれど、妓載
せて微絃に和し低吟試みる粹人はあり。あはれ櫻宮の春、
あながち俗とのみ評すべきに非ず。一瓢を友に酌む俳人も、
蝶を追うて摘草する子も、片肌脱いで踊る若人も、徳利のま
、に爛して、口づけにする職人も、塵に汚れし鮮を口にす
娘も、興に於てなごて甲乙あるべき、吾が花の旅も人の目
よりは可笑しく見ゆめり。

(春) ○花の旅 (水部の春)

辭す
去るを云ふ。

今し
しは助字。今
ま云ふに同じ

不許云云
輩は臭氣を帶
ぶる菜又は酒
を寺内に運ぶ
を禁すとの義

◎時序

(春) ○花の旅 (水都の春) 二百六十四
源八渡は少し上流に在り。淀川橋架らざる前は、いと賑ひし
よしなるも、今は稀なりと聞きしかど、五人十人と渡す船は
絶わす東西に往交ふ。其西岸へするは櫻宮を辭するにて、東
岸へするものは、此處の春に酔はんとする人々なり。今し吾
は西岸へ上り、北のかた鶴満寺を訪はんとす。

鶴満寺。鶯塚

寺は源八渡より七八町の北、彼岸櫻の名所なれど今は散りて
無く、十株餘の櫻花どりどりに咲き、破れし寺の門を掩ふ。
標石に『不許葷酒入山門』と刻めど、向ふ鉢巻にてカツボン
踊る粹な僧侶の多き世の中、花下に酌むは愚かや、酒肴を携
ぐ店さへあり。静けき境なればと、今日は此處に初めて杯を

當山
當寺と云ふに
同じ。

古梵鐘
古き釣鐘。

遁勤
字の書き方の
勢よきこと。

わちぬ
死せりこの義

◎時序

手にしぬ。

當山は天台律宗、開基草創共に不詳、延享年間忍鏡上人の
再建にして、本尊は慈覺大師作の阿彌陀佛、觀音堂には秩父
阪東、西國各巡禮所の觀音佛を安置す。俗に百體觀音と云ふ
境内に古梵鐘あり、長門の國主毛利氏の寄附に係るもの、銘
あり、字體遁勤、古色掬すべし。

鶯塚は、鶴満寺の北五六町の路傍にあり。相傳ふ、往古此里
に長者ありて一人の女をもてり。掌中の玉と愛殊に深くも至
れり。女常に鶯を愛し、春を待ちて夏の至るを悲む。歡樂
の極まる所、其女幾程もなくして死しけるが、鶯も亦餌を食
ますして終にわちぬ。父母いたく歎き、共に之を葬る。時人

(春) ○花の旅 (水都の春)

◎時序

一説
或る説とのこ

香魂
むすめのたま
しひ。

巨船自由
大船が思ふま
いにこの義。

御陵
おほか。みさ
さき。

(春) ○花の 旅 (水都の春)

二百六十六

之を鶯塚と名づく。一説に 孝徳天皇長柄の豊崎に宮造し給ふ時。皇后の遺骸を納めし塚とも云ふ。毎歳元朝、此塚の邊に來れば、鶯の初音を聞くと言ひならはせり。塚は小さき碑石建ち、蔦にからまれて苔蒸し、地下の香魂何をか夢むぞ。今は小祠を營み、新しき硝子の燈立てらる。

附記す。尙、北に訪ひ度て訪はざりしは江口里とて、六七百年前までは巨船自由に出入し、京都上りの客は、此處にて川舟に乗換へたりと云ふ所。
豊崎宮舊址は、孝徳天皇宮居の地、白雉二年十二月都を此地に遷させ給ひし古跡、本庄の内なる中津川の南岸に在り。帝の御陵は大阪磯長陵。河内國南河内郡の山

寂び云云

荒れはてたり
さ聞きしと云
ふ義。

返討

討たんとして
却て討たるい
こそ。

水都

大阪の別名。
川多きより云
ふ。

瀬踏

けん。
けん。

◎時序

田村大字山田に在るなり。

源光寺は南濱に在り、融通念佛宗一派の本山、境内に詠歌堂、子守勝手祠あり、今は寂びたりと聞く。

崇禪寺は、北中島村に在る曹洞宗、正徳年間、郡山の藩士遠城重次、安藤光乗の兄弟、敵生田傳八の爲に返討に遇ひて死せる墓あり、寺前を崇禪寺馬場と云ふとぞ。

水都の春の後に一筆

櫻宮の花に釣られて、寄りしと言は、言はるべき此大阪、中之島公園を瀬踏みに、一日半を處々の名所巡に費し、西は新町九軒の夜櫻、南は天王寺の附近を限り、北は鶴満寺にまで及ぼしたり。そが中にも南御堂、北御堂、座摩神社、御靈

(春) ○花の 旅 (水都の春)

二百六十七

漏しぬ
残した。訪は
ざりしこの義

◎時序

夢馳す云云
心せん云云

草々
そこく。急
ぐさまに云ふ

煤烟
工場の烟突よ
り出づる烟。

参差として
高低として
云ふ義。

隠見
見はかくれず
るここ。出沒

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百六十九

汽車は数聲の鐵笛いさましく、煤烟しげき大阪を辭しぬ霞む平野の九里餘を一瞬に、桂川を過ぎて京都に近づけば、花曇の空うらくと低う見わた、忽ち吾を迎ふる東寺の塔、身はゆくりなくも千年の昔に旅せる心地しぬ。見渡せば山容温にして樹色秀で、参差として隠見する祠宇寺樓、嬌雲は窈窕として古都を飾り、眼前に一大活畫を展開し來る。
言ふも愚なれど此處京都、桓武帝以降、年を閱する一千餘年、朝を經ること七十二、明治の遷都に至るまで帝政

京都の花月影

(春) ○花の旅 (水都の春)

二百六十八

神社をも漏しぬ。他には西天満より福島にかけ、西南しては築港さては櫻島遊園地、その東には茨住吉、その又東南には土佐稻荷、阿彌陀池、市の正南には今宮附近の勝、大阪に名所なしと云ふも、細かに探らば尙三四日を要すべく、一々擧げもせば、残せる所は五六十の上にも出づべきか。京都の花に夢馳するものならず、足棒にして歩き廻ればとて、花にゆかりなき處も多く、記すればとて大阪の案内記めくも本意ならず、又訪ふ折もあるべしと思ひきり、暮れ残る今日の半日を静けき宿に身を投じ、日記の手入に餘念なく、酒飯も草々に尙筆執り、夜深く寢に就きぬ。あはれ今宵の吾夢、落つるは東山か、嵐山か、明日は是が非でも筆に上さん、京都の春

◎時序

明媚

山水の清らかに
にして景色よ
きこと。

蕪淵

あつまる處も
こと。

淵源

おこり。おほ
こと。

不倫

不當なること

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百七十

一に茲に出づ。しかも山水明媚、京都の面目は古蹟に保
たる、に非ずや、京都の生命は景色に存するに非ずや。
且つ忘るべからざるは、宗教の蕪淵なると、日本美術の
淵源なる事に非ずや。

東 山

兩本願寺と興正寺は暫く珠數つまぐる老婆に預け、久しく夢
馳せし東山へと、電車を驅りぬ。山水は固より大阪に幾萬倍
して佳に、比するも不倫に陥るべけれど、あはれや電車は幾
萬倍もの下に落ち、千年前の古式なるべく、乗心地悪しきは
嬉しからず。然ればとて後へは退かず、貧乏ゆるぎして四條
に着きたり。東すれば、迷ひもやらで、八阪神社に來りぬ。

謝安の亞流

謝安云ふ人
に似たる風流
仲間。

問道

ちかみちの
けみち。

春きて

夕日さらけ
こして沈みて
その義。

豪遊

はてなる遊。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百七十一

祇園の夜櫻は、幾夜の眺め老いて散りたれど、知恩院附近は
今し花の眞盛り、赤ゲットの道者もあれど、妓を携ふる謝安
の亞流も少なからず。子で歩かる、夫婦かな、とは一人旅の
吾事にあらずれど、春は兎も角も東山、微絃風に傳はりて聞
ゆるも風流に、問道を南すれば、眞晝を聲客ますに鳴きに鳴
く鶯、都は鳥まで開けて人を恐れず、思へば優しからずや。
興は清水にて盡き、いと暮れがたき春の日も亦西に春きて
花度りて來る疏鐘に送られ、再び四條橋上來れば、北の三
條大橋、南の五條橋、半ばうす烟に隠れてたぼろに、春月は
影を加茂の清流に碎き、楊柳は風前に舞を奏し、兩岸の樓臺
には紅燈上り、誰か豪遊をなすらん繁絃涌く、千金もやがて

◎時序

物言ふ花
美人を云ふ。

掩うて
かくして云ふこと。

懸隔
かけへだて。
ちがひ。

群易し
俗に謂ふ閉口
しての義。

手持無沙汰
きまり悪きこと。

鎖す
いづまりまします。

微風
そよ吹く風。

一樹
一本の木さの義。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百七十二

は烟と消え終るべし。吾は所定めぬ花の旅、宿かるは何處も厭ふことなげれど、物言ふ花の色香競ふほとりは、却て風流ならじと野暮を掩うて粹人めき、四條小橋の旗亭に草鞋の紐を解きぬ。彼處と此處、言は、十歩百歩、雅俗の懸隔如何ぞや、と心に問答してのをかしさ、一人なれば議論の出やう筈もなく、高瀬川の水聲清き小さき客坊に身を横ふ。一瓶の酒に微酔を買へば、晝の程に疲れし足も輕し。京極の素通りと出掛けたれど、俗なるに群易し、其儘宿に歸れば祇園の夜櫻は、如何にと京美人の家婢に嗾されぬ。其夜櫻は既に散りたりと答ふれば、祇園には四時に老いやらぬ花あり散れるは眞の花なるべし。と二の矢に早くも手負ひし吾れ、

手持無沙汰に無言のまま、東山の名ある勝地の彼處此處、びく／＼に項を分ちて日記に書きつく。

八阪神社。二軒茶屋。八阪の塔

八阪神社は、一に祇園と稱して官幣中社、圓山の麓に鎖す。本殿の中央は素盞鳴尊、西の間は奇稻田姫、東の間は八王子なり。境内には櫻樹多く、今し花の眞盛のこと、て、微風吹き度れば、ひら／＼と一片二片の香雪を、吾が旅笠の上に降す。祇園の夜櫻とて名高きは、神社の上手に在る大なる一樹の垂枝櫻を云ふ、花は既に散りてなし。

本社は、聖武天皇の天平五年、吉備大臣唐土より歸朝ありける時、素盞鳴尊に牛頭天王の名を附し、播州姫路の北なる廣

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百七十三

◎時序

靈夢 神佛の示現ありたるくしき夢。

疫病 はやりやまひ

流行 はやること。

濫觴 おこり。ほじまり。

罐子 ゆわかし。ちやかま。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百七十四

峰に祀りしを、貞觀十一年山城國八坂郷感神院に移し、同十年藤原經基靈夢に感じ、紫宸殿に模りたる社殿を造營したりしが、この年疫病流行したりしが、即ち疫神の祟る所なりとし、卜部日良鷹と云ふもの、京中の男女を率ゐて六月七日と十四日との兩日に、疫神を神泉苑に送りぬ。然るに其翌年も亦疫病流行しければ、民またも神泉苑に神輿を送る。爾來之を例とせるが、今日に行はる、祇園會の濫觴とぞ。二軒茶屋は、今の中村樓の地にありしもの、往昔は詳かにしがたけれど、慶長の頃は兩側に各一軒の茶屋あり、店頭に罐子をかけ、常に湯をたぎらして香煎をたて、賣りたる由、のち此茶屋衰へ、八坂感神院の賽人の爲め精進を旨とし、田

名残

其物事のすぎ去りて尙残れること。

寶塔

塔に同じ。寶は敬稱。

善美云云

此上もなき美しきさまをつくしたること。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百七十五

樂を製して酒飯を鬻ぎしが、遂には名物となり彼の「祇園豆腐の二軒茶屋」と謠はれしなり。其名残とも云ふべきか、神社の南側に茶店軒を花下に聯ね、酒飯をとるべき所あり。八坂の塔は、舊八坂法觀寺の遺跡にして、五層の寶塔むかしのみ、に半空に聳わ、今に尙洛東の一壯觀たり。此寺、推古帝の御宇聖德太子草創したまひ、殿堂伽藍善美を盡したりしを、星移り物換り何時しか亡び、塔の北に太子堂、北方に藥師、歡喜天、辨財天等の小堂を存するのみ。又、八坂と稱するは、もとの八坂郷に屬するが故にして、北は祇園より南は清水寺の麓に至るまで、祇園阪、長樂寺阪、下河原阪、法觀寺阪、靈山阪、三年阪、山の井阪、清水阪等の八坂あるによ

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

接す
こなる。つらなる。

山門
寺院の門を云ふ。

洛東の隨一
東山に於て第一の義。

擴張
おしひろむること。

知恩院
八阪神社の東北、華頂山の麓に在り、南は圓山に接す。浄土宗鎮西派の總本寺にして、華頂山大谷寺と號す。圓山を右に見、櫻咲き匂ふ馬場を北し、すぐに山門を仰ぐ。附近は花によきのみならず、秋の紅葉の眺めも艶に、遊人の跡を絶たず。而も寺は其宏壯なること、實に洛東の隨一。建曆元年、僧慈鎮この寺を僧源空に寄附して栖止せしむ。當時南禪院と號しぬ。承安四年開基、吉水禪房と號し、のち今の稱に改む。慶長八年徳川家康地域を擴張し、嶮岨を平げ堂宇を營みたり。のち徳川氏遂に後陽成帝の八子良純法

屈して云云
無理に得心させて義子となし。

工を極む
美術の程を極くして其度の極點に達するを云ふ。

喧傳
世にもてはやさるること。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

親王を屈して猶子とし、華頂宮と稱して院務に輔し、國家鎮護の大道場に擬しぬ。寛永十年炎上、徳川家光重興す。正堂は桁行二十四間、梁間十九間、集合堂は桁行二十三間、梁間十三間、大方丈、小方丈、庫裡等すべて土木の工を極む。山門は是より前、元和二年徳川家忠の造營にして、宏壯世に聞ゆ。又、鬱金櫻の名木あり、他の花も亦多し。本堂の正面に掲げし大谷寺三字の額は、後奈良帝の宸筆。世に知恩院の傘と喧傳するは、其東南隅の檐にさしたるもの殊更に完璧の建築に緻瑕を存し、魔除に供へたるものぞ聞くがま、に、數多の人と共に仰ぎて見ぬ。方丈は本堂の背後より廻廊を度りて之に通ず、寺僧に請うて

◎時序

結構 作りか
た。

廟 たまや・廟舎。

直徑 さしわたし。

撞木 鐘をつき鳴ら
す爲の木。

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

二百七十八

各室を觀る。廊下は所謂鶯張にして、歩み行くに聲あり、
すれて音を發する結構なるべけれど、林を隔て、鶯聲を聞く
が如き心地す。襖の繪は、狩野諸大家の筆に成り、中にも拔
雀、八方睨の猫は最も名高し。
山腹には勢至堂、紫雲水、圓光大師の廟、一心院等の名蹟を
訪ひ、誰知らぬ者もなき大釣鐘は、本堂の東南なる山間に在
り、鐘樓は方四間、鐘の高さは一丈八尺、直徑九尺、厚さ九
寸五分、寛永年間の鑄造、料金を出して撞くを得、吾に大力
あらしめば、十分に撞き鳴らして東山をゆるがし、萬花を一
時に散らしめ、香雪を滿地に布かしたきも、撞けばとて撞
きどころか、撞木さへ引くを得ざりき。

圓山。長樂寺。將軍塚

淨刹 寺院と云ふに
同じ。

俗語 民間のはやり
うた。

酒飯すべく のみくひさる
いこの義。

◎時序

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

二百七十九

その昔、圓山安養寺と云ふ淨刹ありしが故に此名あり。京都
第一の散歩場にして、俗語に『今朝も来て見る雪見酒』とは
此處の眺め、全市を隔て、西山に對し、雪見を第一とすれど
も、四時の景盡くることなし。祇園よりすれば、右に中村樓
を見、爪先上の阪攀づれば、老木若木の櫻の咲き亂れ、常磐
木のみどりに其花光映じ、左右は多くの酒樓茶寮、酔ふも醒
すにも自由にて、其名高きは正阿彌、左阿彌、文阿彌、也阿
彌、圓山鑛泉場等、地の高下に隨うて參差として笹竹、或
は酒飯すべく、或は宿すべし。中にも也阿彌せは、初め多福
庵又は一乘院と號し、慈鎮和尚閑栖の舊蹟、圓光大師も亦曾

清水
清水と同じ。
しみづ。

◎時序

名利
名高き寺院。

風光
風致。けしき。

一樹一石
一本の木。一
片の石に至る
迄この義。

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

二百八十

て此に住したることあり。清泉を吉水と云ひ、今に尙石階の
側に涌出す、世に慈鎮を稱して吉水和尙と云ふは、此の泉あ
るが故なりとぞ。

長樂寺は、ぬれて紅葉と謠はれし名利、圓山鑿泉の南麓に在
り。初め天台の別院にして延暦年間、桓武天皇の草創、傳教
大師の開基たり。境内の風光、唐土の長樂寺に似たれば、其
名を取れりとかや。のち南隣の安養寺と共に國阿上人の住す
る所となり、改めて時宗として今日に至れり。寺には什寶多
く、庭は相阿彌の經營と稱し、一樹一石頗る古雅。

頼山陽の墓は、長樂寺の上手に詣づべし。吾も亦展墓の人と
なり。花陰に諸家の碑文を読み、且つ三樹氏の節烈を追懐し

展墓
はかまゐり。

秀づ
きはだつと云
ふ義。

三線
三條に同じ。
みすぢ。

奠鼎
都を定むるこ
と。

◎時序

高 臺 寺

春風に涙を灑ぎぬ。地は眺望に富み、頼家の墓碑並び建つ。
將軍塚は、圓山の絶頂に在り。遠くより之を望み、兩三株の
青松秀づる所は、即ち塚の在る山上ぞ。登行十町餘、熊笹を
しわけて上る。路は知恩院、圓山、長樂寺よりする三線あり
頂に立てば山城の半部は之を脚下にすべく、春の眺め殊に
宜し。相傳ふ、桓武奠鼎の初め、長八尺の土偶に鐵甲を装ひ
且つ弓箭を携へしめ、之を西面に埋められぬ。是ぞ今の將軍
塚にして、王城の守護神たらしめんとす。叡慮に出でしもの
なりとぞ。

(春) ○花の 旅 (京都の花月影) 二百八十一
建仁寺、安井金毘羅、双林寺は、之を歸途に逆に訪ふべ

◎時序

壯麗
非常につつく
しきこと。

占められ
取られさ云ふ
義。

幽艶
静かにして美
しきこと。

夫人
おくがた。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百八十二

く、長樂寺よりは南隣の東大谷を訪ひ、親鸞上人廟舎の壯麗なるが、春樹青苔の間に五彩燦爛なるを拜し、東漸寺を素通りし、今し訪はんとするが高臺寺なり。

東山の眺望も花も多くは僧樓に占められ、此寺も櫻なきにあらざれども、老樹に雪漲すものなきにあらざれども、古來萩に名を得し所とて、春の麗しき景も秋の幽艶なるには及ぶまじき心地す。

當山、初めは曹洞宗なりしが、今は臨濟宗にして建仁寺に屬す。境内には佛殿、唐門、方丈、客殿、小方丈、開山堂、豊臣氏廟などありて、寺僧に請うて一々觀るを得たり。高臺寺の名は、豊太閤の夫人北政所、亡母高臺院湖月尼の追福の

餘威
のこれるいき
ほひ。

修飾云云
かざりが極め
てりつばなる
こと。

韻致
おもむき。

展を云云
歩みて進みし
この義。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百八十三

爲め、雲居寺方丈の遺跡に就き造營したるが故の名。

流石に豊臣氏餘威いまだ衰へぬ時代に成れるにより、修飾最も偉麗、内張の繪は主として土佐狩野諸大家の筆なり。中にも豊臣氏廟舎の如きは、珠玉金銀を鏤めて光彩陸離、殆ど人をして眩せしむ。又、時雨茶屋、傘茶亭は寺後の獨秀山に在り、共に利休好みの茶寮、韻致掬すべきもの、今日の花もさることながら、西風吹きそむる秋の萩、錦を裁し枝々紫雪を綴る、如何に静けき眺めなるべきかを偲ばしめぬ。

附記す、本寺の西に六道珍皇寺、六波羅密寺、愛宕寺あり、日あらば歸途に訪ふべく、展を靈山へと運ぶ。清水も既に近かければ、必ず筆に上すべくと其時は思へり。

◎時序

今に尙
現今に至るも
矢張。

春霞縹緲
春の霞の引き
はゆること。

國難に云云
國家に係る事
變に死するこ
と。

(春) ○花の旅 (京都の花香月影)

二百八十四

靈 山

靈山と名づくるは、靈鷲山の略にして、一に鷲尾山とも云ふなり。もと靈鷲山正法寺の遺蹟、今に尙山上に名殘の院あり此處、亦洛東の一名境、京都全市は碧瓦を春霞縹緲の中に疊み、加茂の清流は素練を麓に引き、西北の峰巒これを一々指點すべく、遠くは桂川の流れ、淀や山崎の白帆の影みな是れ畫中の物たり。
地は高臺寺の上方にして、古より墳墓を營むもの多く、維新前後國難に殉したる諸士の靈を祭れる沼魂碑を築く。中腹には木戸公夫妻の墓、少し南すれば梁川星巖の墓も有り。眺望と憑弔に富む此處、半日の登臨以て詩囊を肥すに足る。

維新の際
明治中興、即
ち王政復古の
當時。

靈場
佛寺ある地
の義。又寺院
の義。

伽藍
寺のこと。僧
舎。

◎時序

清水寺。歌の中山

音羽山成就院と號し、清水阪を攀ちによち、左右に鸞ぐ陶器店の中を通りすぎ、將に境内に入らんとする處に、忠僕茶屋あり、維新の際當寺の住僧たりし月照師の、從僕が營みそめたる名殘、西村天因氏の記あり。
當寺は洛東第一の靈場にして、其名遠近に鳴る。大同元年、平城天皇より下し賜ひし、紫宸殿を此地に移して伽藍としたるもの、前面なる懸崖に棧を架す、樓屋を設く。世に清水の舞臺と云ふは是。境内には花多く、春を探り且つ賽する客群集す、堂前には香烟常に絶わす。欄によりて見渡せば、北方斜に京都市を望み、遠く雲烟を隔て、は夕陽低きほどり、淡

(春) ○花の旅 (京都の花香月影)

二百八十五

睥底云云
見らるゝこの
義。

◎時序

衆目云云

多くの人が最
も注意して見
る云ふ義。

靈像
くしき佛像。

遊覽

みまはるゝこと
けんぶつ。

後丘
後方のなか。

開關

僧家にて。儀
式の開始のこ
と。

人工

自然ならぬこ
と。ひさで。
人造。

語る云云

はなしするこ
と。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百八十六

路島山をも睥底にすべく開けど、今日は見えず。金剛山はた
ぼろに、河内の連山を凌ぎて天際に聳ゆ。堂の軒に諸大家の
扁額多き中にも、海北友雪が田村將軍鈴鹿合戦の大額は、殊
に名高くして衆目を引く。

本堂に安置する十一面四十臂の觀音は、其長八尺、傳へて化
人の作と稱し、兩壇の脇立は勝軍地藏及び勝敵毘沙門にて、
延曆十四年田村將軍東夷征討の折、本尊と共に陣頭に現れて
其軍を救ひたる靈像と世に名高く箭の痕處々に存す。
素通りに等しき旅の遊覽、その凡てを挙げがたけれど、成就
院は維新の偉勳月照上人の住房たりし處、爪形觀音は、悪七
兵衛景清が爪頭の作なり。地主權現は郷社、大己貴命を祭

れり。鎮座地は本堂の後丘にして、社邊櫻樹多し。其角が、

京中へ地主の櫻や飛ぶ蝴蝶

と詠みしは、此處の花なり。奥院は延鎮法師住居の遺蹟をや
阿彌陀堂は瀧寺山と號し、法然上人念佛三昧開關の處なり
古の北觀音寺は今の田村堂にして、田村鷹、行寂居士、延
鎮法師、聖德太子、鈴鹿權現等の像を安置しあるなり。朝倉
堂は、越前國司朝倉彈正貞景の建立に係れるなり。
音羽瀧とて名高きは、笑止や人工により樋より落つる低き三
條の瀧、之を舞臺より東南に下りて觀ぬ。夏によく秋も紅葉
に宜しと聞きたるが、境たる春の此頃も静かにして、仰げば
舞臺にて語る人の聲は、花を漏れて聞ゆ。貞柳が、

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

二百八十七

◎時序

得意
おはこにて。
十八番。

老樹鬱蒼
古木のいたく
茂ること。

開山
眞宗を開きし
人。

(春)

○花の 旅 (京都の花月影)

二百八十八

さら〜と音羽の櫻ちりつんつ
てんと三條の瀧の白絲
と、得意の狂歌に嘲り得て妙なり。

歌の中山とは、音羽瀧の南を云ひ、老樹鬱蒼として晝も小暗く、宛然たる深山、淋しき心地す。奥に進まば清閑寺、其北には六條帝の清閑寺陵。高倉帝の後清閑寺陵あり。此寺、訪はざりき。

西 大 谷

此處、龍谷山と號し、眞宗の開山親鸞上人の廟所、清水より西南に下りて得たり。經來し路傍に墳墓の高低たるは、後にて鳥部山とぞ聞きぬ。門前の風光、すべて人工に成ると雖も

◎時序

班すればか
加はる程あり
ての義。

俗腸
けがれし心さ
の義。

中心
まんなか。

界限
こいら近所。
附近。

(春)

○花の 旅 (京都の花月影)

二百八十九

自然も亦及ばざるの韻致あり、唐門の前に皎月池あり、清波の上に乗る石橋を圓通橋と稱す。俗には大谷の目鏡橋と云ふ。洛東名所の一に班すればか、花は夕日に映けて美しく、鶯のしば鳴くは今日を惜むの歌にや。夏は池の蓮花に眼を清うすべく、秋は紅葉に俗腸を洗ふべくの境。

大佛殿方廣寺附六波羅殿址

西大谷より南正面通に之を得たり。此處、古の六波羅殿址の中心と云ひ、南北六波羅兩廳も亦この界限に地域を占めしなり。堂の高さ二十丈、佛の高さ十六丈、天正六年豊太閣の建設する所、境内の敷石、石垣などは諸侯の寄附にして、其家名又は紋章、出所等を石面に鐫る。慶長元年の大地震に

◎時序

竣工
土木の工事を
すませすこと。
落成。

懷舊の感
むかしこのし
ぶ感情。

洪鐘
大なる釣鐘。

方一町餘
四方一町あま
り。

一門
平家一族を云
ふ。がうち。

一炬に焼燼
焼けて灰とな
れるを云ふ。
一炬一本のた
いまつ。火を
云ふ義。

字存す
小名が残るこ
なり。

◎時序

(春)

○花の 旅 (京都の花月影)

二百九十一

○花の 旅 (京都の花月影) 二百九十
崩れ同七年秀頼再建す。寛文二年再び震災に罹り、竣工幾程
もなく、同十年には雷火の爲に殿堂焼亡す。近時漸く大佛の
半像を造りて、僅かに懷舊の感を引かしむるに過ぎず。
本寺に洪鐘あり、高さ一丈四尺、徑九尺二寸、厚さ九寸、慶
年十九年秀頼の鑄るところにして、其銘に國家安康の文字あ
るより物議生じ、遂に大阪滅亡の原因となりしは、史にも見
ぬ、また何人も能く知る所たり。

附記す、六波羅殿は、北は五條松原通に起り、南は七條
に及び、東は小松谷をこめ、西は鴨川を限れり。當時大
小の邸館散在し、今の方廣寺は其中心たりしとぞ。殿は
平家の邸宅にして、初めは平忠盛の邸にして、方一町

餘なりしも、其子清盛に至りて益擴張し、一門の亭
館を周圍に置き、五千二百餘字の多きに至り、地域は二
十餘町の廣きに亘れり。壽永二年、宗盛西奔の折、一炬
に燈燼して今影を留めざりき。
鎌倉武家に及びては、源頼朝こゝに殿舎を置き、承久
以後には、北條氏の子弟新に館を起して兩檢斷と稱す、
六波羅兩廳は即ち是。當時南北の二邸ありき、故に兩六
波羅とも云ひたり。其南方廳址は、平氏泉殿の地にして
今の大佛殿の邊、當時平氏の本邸たりしなり。北方廳址
は、平氏北御所の地、今の建仁寺の西、五條松原の南に
北御所の字存す。此廳、元弘の亂に滅亡せり。

◎時序

遺骸 しがら。なき

宏壯偉麗

廣大にして極めてうつくしきこと。

首級

くび。しるし

座主

貫主に同じ。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百九十二

豊國神社。阿彌陀峰。耳塚

豊國神社は別格官幣社、豊太閣の靈を祀る、大佛殿の南隣とす。豊太閣の遺骸を葬りたるは、社背に聳ゆる阿彌陀峰なり。殿宇は十餘年前の造營に係り、宏壯偉麗。耳塚は、神社の門前に立てる碑石を云ふ。太閣が朝鮮征伐のとき、獲たる首級の耳を埋めたる所、故に此名あり。當時の斬首幾萬と數知らず、其一々を携へ歸る能はざるより、或は耳あり或は鼻そぎ、之を鹽漬として本國に送れるものとぞ。附記す。程近き妙法院は、延暦寺の惠亮僧正の開基、代々法親王を以て相續したれば、妙法院宮、綾小路宮、小阪殿など稱し、山門の座主として名高き寺、智積院は、

天死

幼年にして死のこさ。わかじに。

二刹

二つの寺院。

回祿云云

火災に罹りて影も形もなきやうになりしを云ふ。

襲ふ

つぐみはらふ。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

二百九十三

三十三間堂

豊臣秀吉嘗て其子棄君の天死を哀しみ、追福の爲に建立し、當時祥雲寺と號したり。のち根來の僧徒に賜ひ、知積院と改號す。本尊は不動明王、興教大師の作とぞ。餘は、急がれて此二刹を訪ひ漏しぬ。天臺宗にして蓮華王院と稱す。豊國神社の南に暮る、日を急ぎて訪ひたり。鳥羽法皇三十三間堂を營み、得長壽院を命じ給ひしは、長承元年のことぞ。後白河上皇が同じ堂を建立し蓮華王院と名づけ給ひしは、長寛元年の事ぞかし。されども此兩寺、寶治年中の回祿に烏有に歸しぬ。今の三十三間堂は文永三年前記二院の再興にして、蓮華王院の名を襲ふ。堂

◎時序

坐像
立像の對。坐
したる形の像

千軀
千體を云ふに
同じ。

内陣
本尊を安置す
る處。

通矢
此方より射て
彼方にさしか
する矢。

(春) ○花の旅 (京都の花香月影)

二百九十四

は南北六十間餘、東西八間三尺餘、南北に至る柱と柱との間
々に三十三あり、即ち二間毎に一柱を立てしなり、故に此名
あり。本尊は坐像八尺の千手觀音、康慶の作なり。又同壇に
長四尺の二十八部衆、別に千軀の千手觀音は其内陣に列し、
各五尺許の立像、運慶湛慶兩佛師の作、本尊を併せて之を
一千一軀の觀音とは云ふなり。堂の西側即ち裏手には弓塲あ
り、三十三間の通矢など名高し。
附記す、相接して帝國博物館、南すれば泉涌寺、通天橋
の紅葉にて名高き東福寺、共に訪ひ漏しがたき臣利なり
しも、日は既に没したり。足もや、疲れたり、歸りにと
思ひしも双林寺などにも背きぬ。

山容云云
山の形がやさ
しくして美し
きこと。

四時云云
春夏秋冬のよ
き眺めを一所
義によするもの

下流
かはしも。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花香月影)

二百九十五

嵐 山

春は櫻の嵐山、夏は納涼の大堰川、秋は紅葉の嵐山、冬
は雪の眺めに宜し。山容温にして秀、青松の間に櫻花と
紅葉多く、四時の佳景を一區に鍾む。櫻は、龜山上皇の
芳野より移し植ゑさせ給ひし所にして、
春ごとに思ひやられし三吉野の

花は今日こそ宿に咲きけれ

この御製もあり。麓を繞りて大堰川の水清く、花に浮名
を流して下流は桂川となる。夢窓國師の名づけたる渡月
橋を渡りて、川にそうて上れば戸無瀬瀧、千鳥ヶ淵、上
流には鑛泉浴場、其上の山を辿れば大悲閣千光寺に至る

偉人の碑
すげれたる人の
のいしぶみ。

別荘
しもしやしき。

筆着くすべ
書くべき手段
この義。

香露云云
花の露の落つ
る形容。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花香月影)

二百九十六

何れも花を戴きて行くなり。

花の山二丁のぼれば大悲閣 芭蕉

閣前に角倉了意とて、大堰川を改修したる偉人の碑あり

其銘は林道春の撰なり。橋の東詰には、三軒家あり。三

友樓あり。殊に名高きは八賞軒にて神戸の紳士川崎氏の

別荘なり。少し東には小督局の墓、東本願寺の別荘あ

り。餘が記は次に、

雨らしき空を、一刻も早く、嵐山へ志し、やがて達しぬ。

古來人々の言ひ古したる此處、筆着くすべあらじと思ひしに

折しも微風雨を送り、半峰以上は霧に隠れて見えず、松は夢

よりもたぼるなり。あはれ萬花等しく露ひ、香露珊々として

筏師
筏をくだす人

紅裙
藝妓を云ふ。

低酌
こさかもしり。

名祠古刹
名高き神社や
古き寺院。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花香月影)

二百九十七

滴り、大堰川下る筏師の姿をかしく、晝も雷ならず、日和よ

くば遊人山を築きたらんも、晴着のぬる、を厭うてか着倒れ

の京人少なく、水畔の茶棚にも酒樓にも、僅かに數ふる許の

花見客、緩う流る、川に畫船浮べ、紅裙載せて微絃を弄し、

低酌を試みる風流男は今日しも見えず。静けき春に逢ひしも

雨天なればこそと吐きぬ。今日訪ひたきは、西山一帯の名祠

古刹の春景色なりしがと、せめて花の旅の甲斐に、此に優し

き夢結ばんと、雨の欄干に身を寄せて酌み暮し、遂に一泊す

夜更けて枕上尚滄々の聲しげく、夢破ること、抑もや幾度、

餘りの事に簾捲けば、嬉しや雨にはあらで水の音、たぼる月

は影を大悲閣上に懸け、花に言ひ知らぬ景と情とを添ふ。詩

◎時序

扁舟
小舟の義。
こぶね。

山走り云云
舟の下る形容

行程
みちのり。

峡谷
たにあひ。

(春) ○花の旅 (京都の花香月影) 二百九十八

こそ出来ね、酒は又しても幾杯かを重ねぬ。
保津川とは、大堰川の上流の稱、兩岸躑躅にて名高く、
山水と併せ賞せんとして、龜岡附近の保津村より舟を僦
ふ者多し。扁舟既に岸を離るれば、前に見し峰巒は忽ち
後に、今ありと見し岩は忽ち影を失ひ、山走り岸行き、
樹石皆動くが如し。しかも數里の行程夢の間に過ぎて清
瀧の出合、此を越ゆれば、水漸う緩く、やがて嵐山の麓
に至る、之を保津川下しと云ふ。其峡谷の間には、岸高
く水急に、躑躅は咲き亂れて燃わんとし、舟は岩を避け
湍を逆に落し、手に汗握ること多しとぞ。序でなれば、
聞きし大要を斯くなん。

仁和寺の櫻

落飾
髪を剃りて佛
門に入ること

宸居
おすまひ。

境域約
境内の廣さが
おほよそ。

雨後
あまあがり。
雨餘。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花香月影) 二百九十九

御室の花とて名高きは此處。嵐山よりは、幾多の寺院や神祠
と古蹟を、心ならずも漏して來しなり。眞言密乘の巨刹にし
て、光孝天皇の御宇仁和四年の創建、宇多帝落飾の後、
當山に入りて宮殿を營み給へるに因りて、御室との號ぞある
其後、朱雀帝も亦讓位して此に宸居を定め給ひ、以降世々法
親王の寺務を執る所となり、維新前には小松宮彰仁親王これ
に當り給ひき。
境域約十萬六千坪、金堂、祖師堂、觀音院、經藏、五重塔、
法親王舊殿等、春雲棚引く下に高低と相聳ね、堂舎の間には
幾百株ともなき櫻、今を盛りと咲き亂れ、雨後の地に塵囂ら

他に云云
他の花と相違
の點は。

蟠屈曲折
くねりまがる
こと。

徘徊
たちまはるこ
と。

林泉
には。庭園。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

す、殊に床しき眺めなり。此寺の櫻の他に異なるは、老樹も
幹高く伸びず、蟠屈曲折して地を這ふが如く、花は根元より
咲きて枝頭に及ぶの點なり。微吟して歩すれば、恰も香雲を
踏みて徘徊するが如く、庭は艶雪に埋めらるゝに似たり。是
れ此の花の、名を四方に馳する所以にこそ。

妙 心 寺

山號を正法山と號す、花園停車場より北一町、春風に送られ
て山門を潜りぬ。境内は樹石寂びて苔青く、花は處々に點綴
し、並び聳ゆる老松は秀で、人をして萬岳の風泉を想はしむ
此地初め、清原左大臣夏野の別墅にして、子孫相襲ぎて領せ
しが、花園上皇いたく其林泉を愛し、清原良枝に替地を賜

閑栖の地
心静かに世を
送すまひの地

潜居
貴人の世外に
栖み給ふを云
ふ。

巨利依然
大寺院が昔の
まゝなること

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三二一

ひ、茲に離宮を營ませられ、閑栖の地となし給へり。相尋で
上皇佛を信じ、遂に離宮を擧げて寺とし、正法山妙心禪寺と
名づけ、關山禪師を召して寺基を開かじめ給ひき。而して
上皇自ら方丈の後に一院を草創し、之に潜居し給ひけり。
今寺内に存する玉鳳禪宮又は玉鳳院と云ふは即ち是。
凡そ洛中洛外に散在する名祠古刹、幾度か兵燹その他の災を
蒙りしも、當山は七堂の伽藍昔のまゝにして、未だ曾て毀損
されず。巨利依然として勅使門、佛殿、法堂、玉鳳院、開山
堂、涅槃堂、祥雲院影堂等、參差として樹間に隱見し、いよ
よ佛徳の高きを示す。
塔中に大法院と云ふがあり、その境内に佐久間象山の墓あり

◎時序

太閤
豊臣秀吉を云

縁故
ちなみ。ゆかり。

專にして
獨占してさ云ふ義。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百二

什寶の中にも名高きは、法堂の天井なる探幽の丸龍なり。又祥雲院影堂は、太閤の嫡男棄君の影像を安置する所。もご今の東山の南なる智積院の地に在りて、寺を祥雲寺と號せしが妙心寺の南化和尙、曾て彼寺に住持たりし縁故により、智積院建立の際、此に移せるものとぞ。

龍安寺。等持院

妙心寺の西南三町に四宗兼學の金剛院、相接しては名所の双の岡、其他太秦の廣隆寺、廣澤池、大澤池の勝をばじめ、嵯峨帝の離宮たりし大覺寺は、嵯峨野の秋を專にして萩多く、其北には直指庵、俗に嵯峨の釋迦堂と呼ぶ清涼寺、其南西なる五大堂、それから夫れへと歩を連

◎時序

索通
見たまゝに通

經營
つくること。

假山
つきやま。

別業
しもやしき。別墅。

遺言
言ひのこし。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百三

ば、如何に急がぬ花の旅とは云へ、なごて探り盡し得べきぞと素通りにし、遂に龍安寺を訪ひぬ。此處は妙心寺と近く、御室の東四町餘の處。龍安寺は大雲山と號し、北に衣笠山を負うて南面す。古より鴛鴦にて名高きは、この寺の池なり。林泉は相阿彌が經營に係り、一木一樹を用ゐずして巧みに岩石を組み立て、奇雅を極めたる假山、世に虎の子渡しとて鴛鴦と共に世に著る。此地初め、衣笠左大臣實能の別業にして、傍に一字を草創し、之を徳大寺と號す、是より其家代々徳大寺を以て姓としたり公有の世に至り、細川勝元請うて別墅に充てたりしが、其歿後遺言によりて龍安寺を建立し、妙心寺の僧諡天和尙これが

蟠龍
丸くわだかま
れる龍。

◎時序

迎陵類伽
妙聲鳥の義。
極樂浄土に栖
の如く音聲極
めて微妙にし
て如來の音聲
を除く外は一
切の人天之に
及ばずと云ふ

接合
つぎあはすこ
と。

三百云云
幾度も打ちし
と云ふ義。

封境
盛り土せる處
墓の區域。

草莽
れもく。の義
賤民。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四

開基たり、現に妙心寺末なり。
本堂は東福寺の昭堂を移せるものにて、彼の有名なる屍殿司
が住みたりしもの。天井の蟠龍及び迎陵類伽の圖は、即ち其
作、方丈は、勝元が居館に充たるものぞ。

等持院は、衣笠山の南麓に在る禪刹、龍安寺の西に訪ひたり
足利氏の草創にして開基は夢窓國師、當時は鳳凰山と號し、
義堂和尚の時、萬年山と改めぬ。足利氏歴代の香華院にして
影像は皆束帶佩劍の坐像、年の長幼により寸尺まち／＼、其
最も高きもの三尺を限り、共に寺内の昭堂に在り。彼の維新
の擾亂に際し、諸國の志士幕府の專横を憤り、斬りて三條橋
に裊したるは、この歴代の像なるよ。今安置するものは、其

後再び收めて接合せるなりと。昭堂の西に寶篋印塔あり、是
ぞ尊氏の墳墓にして、高山彦九郎正之が大罵して、三百程の
鞭を加へたるは此墓ぞ。義詮の墓は寺背の山下に在り、今は
墓石なく、唯封境のみを存す。足利の今日哀れならずや。

舊御所。仙洞御所。梨木神社

金閣寺、平野神社、北野天神は明日に譲るべく。再び宿
に引返し、例の日記に夜を更し、今日、朝まだきに筆載
せ、加茂川の柳に顔拂はせ三條橋に迂回して、堺町御門
より舊御所に入りぬ。

内裡の事ども、草莽の窺ひ知るべき限りに非ざるに、これを
しも筆に上さんこと且は畏きわざなり。御所の域は東の方は

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百五

◎時序

攝家
攝政關白に任
ぜらるべき家
柄。

宮鶯
御所にすむ
ぐひす。

封土
高く盛り上げ
たる土。もり
つち。

喬木
亭々として高
き樹木。

御宇
御代さ云ふに
同じ。

炎上後
火に焼けての
ち。

連比
つらなり並ぶ
いさ。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百七

せる喬木あり、池あり橋あり、淋しき中にも雅趣に富みたる地は、もと九條家の邸園にして、吾が通りし堺町御門の西に當れるにて、門の東には博覽會場、測候所等の建物あり。此處より望む紫宸殿は、北方にしてや、西に在り。内廓は、孝明天皇の御宇、安政元年の炎上後、同二年造營せるものにて、四面繞すに石垣を以てす。南門をば正門とし、別に唐門、日御門、公家門、朔平門等あり。紫宸殿は門内に更に宮垣を造り、承明門、日華門、月華門等より御階に通ず。その他清涼殿、清所、常御殿、一の對屋、二の對屋、内侍所、女院御殿、記録所、小御所、御學問所、御休所などの宮殿、紫雲深き所に連比し、何れ畏からざるはなし。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百六

寺町通を限り、西は烏丸通に至る。南は丸太町に堺し、北に今出川を帶ぶ。面積二十五萬坪、古は諸親王家、攝家の邸第多く外廓の内に在りしが、明治の遷都と共に全く廢り、今は廣漠たる遊園地、處々に花空しく吹きて宮鶯徒らに鳴き、東風寂寞として芳草離々たり。南端の西に主殿寮あり、喬木天を摩し、晝も尙五位鶯鳴き、池には春水昔のまゝに湛うて細波暖かに、橋に立てば人影を鏡中に碎く。東方には樹木蒼蔚として靜かに、翠を滴す銀杏の雲を宿す老松、見るからに床しき心地す。車返の櫻と云ふは、曾て天覽を辱ふせる名木なるべく。年記しがたき老樹の封土に護せられ、花は雪より白う亂れ咲く、いと貴し。今は全地を御苑とぞ呼ぶ。今し記

◎時序

昔ながらの
むかしの儘
の義。

拜觀
觀るこの敬
語。

錦鱗
美しき魚の
義。

仙洞
上皇の宮殿の
稱。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

仙洞御所は、御苑の東南に在り。もと 上皇の宸居なりしも
安政元年炎 上後また造營せられず、たゞ其昔ながらの林泉
あるのみ。今日しも拜觀するを得ざりしかど、身を近づくれ
ば幽鳥老樹に鳴き、落花は微風に飜り、いと懐古の念を深
うす。御庭には錦鱗清池に跳り、露霜に寂びたる石は苔蒸し
て千古の色深かるべくや。北に並びて大宮御所あり。皇太
後の住ませ給ひし所、仙洞に劣らぬ御庭のさまこそ聞きぬ。
梨木神社は、別格官幣社、三條實萬卿を祭る、實に故内大臣
實美卿の御父君なり。實萬卿は、光格、仁孝、孝明三帝の朝
に歴仕し、勤王の志殊に深く、嘉永六年外艦の渡來以降、大
に公武の乖離を憂ひ、百方盡瘁する所ありき。のち 孝明天

◎時序

攘夷
外國人を國內
に入れず、又
は外國との交
通を謝絶する
こと。

功績云云
手柄を世に示
されしを云ふ

千古
世の有らん限
り。萬古。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

皇の攘夷の勅書を水戸に下賜せられんとする時、勅使となり
て下向せられしより、會幕府の忌憚に觸れ、遂に落飾して一
乗寺村に閑居し、安政六年五月薨せられたり。其薨する前三
日、朝廷特旨を以て従一位に叙し、文久二年に至りては右大
臣を贈らる。而して近年更に此社に祭り、長へに生前の功績
を旌し給ひぬ。社地は、卿の舊邸にして櫻花多く、餘烈眞に
千古に芳し。
御所に就ては尙語るべき事あり 今上陛下明治元年八月二
十七日御即位式を行はせ給ひしは此處なるよ。翌二年三月
聖駕江戸に幸し、東京に宮城を修造し給ひしより、此御所は
別宮となり、主殿の官吏をして留守せしめらる。其後明治十

◎時序

故宮
もとの宮殿。

叡旨
天皇の御意旨

遷座
遷宮を云ふ。

忠烈
すぐれて忠義なること。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

年 聖駕再び故宮に御駐在あらせられし時の 叡旨には、以後大禮は此地に於てすべしと仰出されぬ。故に皇室典範第二章第二條に曰く、即位の大禮及び大嘗會は、京都に於て之を行ふと。蓋し 叡旨に基づけるなり。

護 王 神 社

別格官幣社にして、和氣清麿公を祀る。もと葛野郡梅ヶ畑村高尾山護國寺境内に奉祀す。曾て護法善神社との號を賜ひ、孝明天皇改めて護王の號を賜ひ、嘉永四年官幣に列せらる。現地は御所の西、烏丸通にして明治十九年遷座す。清麿公が稱徳天皇の朝に在りて、忠烈たぐひ無かりし事蹟は、普く人の知る所、五六株の櫻樹は千古、公の忠魂を護して花咲く。

五山の一
五箇寺の其一つ。

磊何云云
老松の形容。

無絃の琴
松風の音を云ふ。

碑陰
碑の裏面。碑のうしろ。

◎時序

相 國 寺

萬年山相國承天禪寺と號し、京都禪宗五山の一にして其第二位に班す。護王神社より烏丸通を北し、之を今出川通の東に訪ふ。寺域約二萬六千坪、千年の老松積翠重々、磊何として天を拂ひ、春風度れば無絃の琴を奏で、縹緲として雲を流し深く寶閣を護して、最も禪味に富む。境内に東征戦亡之碑あり、明治二年の建設、碑銘は薩州の儒官今藤惟宏の撰、書は西郷南洲なり。これ明治維新に於ける同藩の戦死者五百二十四人の靈を弔ふもの、碑陰に其姓名を刻む。當山は、永徳三年足利義滿草創、僧妙葩を召して開基を命ぜしに、其徳の開基たるに適せざるを以て辭し、師夢窓國師を

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

◎時序
薦めて
推擧して云
ふこと。

最初
はじめ。

樓門
二階造の門。

曼陀羅
淨土實相の圖

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影) 三百十二
薦めて之に當て、自ら第二世を承けぬ。鐘樓にかけある鐘は
南都元興寺の遺物とぞ。

妙顯寺。妙覺寺

妙顯寺は、京都に於ける法華最初の寺院、日像上人の開基す
る所、古は西洞院二條の南に建てられ、後醍醐帝の勅願
所たりしが、天正年間今の妙顯寺前町に移さる。余は之を相
國寺の西數町に尋ねぬ。境内には樓門、五重塔、鐘堂、子安
鬼子母神堂、祖師堂等これあり、結構頗る觀るに足る。什寶
の主なるは長三寸許の黄金釋迦佛、宗祖の揮毫に係る蜀錦の
曼陀羅及び經一丸の曼陀羅なりとぞ。
妙興寺は具足山と號し、法華宗にして妙顯寺の北に在り。春

經讀鳥
鶯の別名。法
華經と鳴く音
によりて稱せ
し名。

一孔
一つの穴。

祈願
いのり願ふこ
と。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百十三

静かにして經讀鳥の鳴く境内には先づ樓門、羅刹堂、祖師堂
花芳坊を見る。祖師堂は、古博多廬山寺の一堂、飛驒の匠の
建築と稱し、諸堂を造るもの模範に供すと聞く。花芳坊は日
蓮上人叡山に在りし時、横川花芳谷の花芳坊に於て作る所、
内に一孔を穿ち自筆の法華經を藏す、山門大亂の折、茲に移
せるものとぞ。又、境内に狩野古法眼以下數代の墳墓あり、
余は幾百年の苔を打ち拂ひ、墓前に額きて去る。

北野神社

七の社と云ふは、むかし染殿皇后の祈願により、奈良の

三百十三

◎時序

勸請
離れたる土地の神佛の靈を移して祭るこ

機業地
はたおりを業とする處。

其室
菅相將のおく

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百十四

春日明神を勸請し、のち伊勢、石清水、稻荷、加茂、松尾、平野の六神を合祀して七の社と云ふ此處も、西なる千本閻魔堂と云ふ引接寺も、その又西の千本釋迦堂と云ふ大報恩寺も訪ふの違なく、此處は西陣ぞと聞くま、に北野右近馬場、北野神社境外に着きぬ。附記す。應仁の亂、細川勝元は室町覇府の東に軍す、故に之を東陣と稱す。相手の山名持豊の軍は其西に營す、故に之を西陣と稱せるにて、今の西陣とは其名殘、堀川以西、一條以北の地を云ひ、名高き機業地なり。社格は官幣中社、祭神は菅原道實、別に其嗣子菅中將を本殿の東の間に鎮す、其室吉祥女を西の間に合祀す。京都の社寺

賽人
さんげいする人。

寸地云云
立錫の地なしと云ふに同じ

垂んとし
なりなんとするを云ふ。

輪奐の美
建築の宏大美麗なること。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百十五

にして名あるもの、一々列擧するに堪へざるも、其賽人の多き此社の右に出づるものなく、官祭の八月四日、私祭の十月四日共に雑沓を極め、境内は殆ど寸地を餘さず。毎月二十五日も亦小祭日、社前は小市を成すの繁華を現すとぞ。抑も本社は元暦元年の草創にして、爾後靈驗漸く著れ、天徳三年に及び、右大臣藤原師輔更に殿宇を増修し、星霜を経るもの一千年に垂んとし、其間しばしば改築し、改築毎に壯麗に赴きて神威を輝かし、今日の如き輪奐の美を極むるに至れり。現在の社殿は、慶長年中豊臣秀頼の建營に係り、社壇の大鏡は、加藤肥後守清正の寄進とかや。境内は甚だ廣く、正門は南に聳え、本殿は北に鎮し、東は塀

◎時序

寒翠

松葉のみどり
を云ふ。

平野

ひろき耕地。

偲ばしむ

おしはしむ。

杏花村店

酒屋を云ふ。

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百十六

を透らして亦門あり、古松殊に多く寒翠滴りて賽人の衣を染めんとし、西は直に平野に接し。少西北に平野神社、尙も進まば金閣寺に至るべし。

正門より本殿に至る賽路は石を布き、左右には數知らぬ石燈籠並び立ち、處々に松簷にて白雲を宿すあれば、老樹若木の梅、葉青くなりて櫻花に映じ、そゞろ横斜疎影の二月の景を偲ばしむ。茶店に憩うて京娘に、平野神社の路はと問へば、彼處よりせよ、間道なりとて社の西の小土手を指す。あはれ杏花村店の酒旗ならねど、耕地を隔てたる一の森に、雪のごと白う見ゆるは、盛りすぎんとする平野の櫻なるべし。

平野神社

天樂云云

雲雀がよき聲
に鳴くを云ひ
し語。

天涯

たびのそら。

四座

座は神を祀れ
る數に云ふ柱
の義に同じ。

◎時序

一步を北野神社の外に致せば、地は既に葛野郡、今日しもうら、かなる好天氣、雲雀は空に天樂を奏で、蝶は地に春の曲を舞ふ。さらぬだに浮立つ此頃、うた、愉快に身の天涯に在るを忘れき。東風に歩する西北二町。やがて平野神社に達す社格は官幣大社、祭神四座、今本社には日本武尊、久度社には仲哀天皇、古開社には仁徳天皇、比咩社には天照大神を祭り、別の縣社には天穗日命を祭る。桓武帝の延暦年中創建、二十二社の一なり。

境内は古より櫻樹多かるに、近年に至りて益之を移植し、歩々櫻ならぬはなく、神殿の左側の如きは香雲艶雪堆く、殆ど天を見ず。その遊人の爲に酒茶を賣る店は、匂こぼる、花

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百十七

◎時序

篝火
かがりび。

熱鬧
さわがしきこ
ご。雑沓。

驕奢
おごりさぜい
たく。

碧苔厚く
青き苔のふか
きか云ふ。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百十八

下に數限りなく、夜に入れば高く篝火を焼きて別に春を成す所謂平野の夜櫻なるものなり。誰やらんの評に、御室は花が人を堆め、平野は人が花を堆むと、以て此境内の夜櫻、如何に熱鬧なるかを知るに足るべし。

金 閣 寺

足利義満が驕奢の昔を偲ぶべき此處金閣寺、鹿苑寺の俗稱なり。平野神社の花を辭して西北七八町、衣笠山の翠を仰ぎ忽ち竹樹別に境を開くに逢ふ。路廣くして碧苔厚く、歩を移す毎に雲生するかを疑ひ、木の葉さら／＼と竹の音に和するも幽に、いつとは無しに寺門に達す。此地、もと西園寺公繼の山莊に屬し、傍に一寺院ありき。公種の時に及び、足利義満

◎時序

比類云云
外に肩を並ぶ
るものなき庭
園。

峙立
高うそばだつ
こご。

勾欄
折れ曲りたる
造り方の手す
り。

偉麗
すぐれて美し
きこご。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百十九

請うて金閣を起し、のち遂に捨て、寺とし鹿苑寺と號しぬ。俗に金閣寺と稱するも、之がためなり。地は衣笠山の西麓にして、境域約一萬五千坪。古來、古雅にして幽邃、天然と人巧と相待ちて、他に比類なき林泉とて名高し。觀覽券を請うて庭に入れば、身は仙境に遊ぶかと疑はれ、先づ案内されし三層の閣、これぞ世に名高き金閣にして方丈の西、庭園の中央に峙立す。其下層は法水院、如來殿、鏡堂などの名を得、中層を潮音洞、上層を究竟頂と云ふ。天井、壁勾欄等、古は皆金箔もて修飾せられて偉麗、豪華の程を盡せるも、そは憐れ一時の夢、足利の威と共に年古るまゝに廢れゆき、今は黒ばみて昔日の影なく、僅かに金色のそれかと

◎時序

水心云云
水中に花の影
のうつるこころ

轉經
おまやう
み下さすこころ

詰れども
おしつめて問
へども

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

三百二十

思ふものを存するのみぞ、笑ふべし。
鏡湖池とは閣下の池なり。打ち繞れる林樹の影を倒に映し、
二三株の櫻花また水心に春を浸して淡く、微風に起つ細波は
何をか呷く。案内者が轉經の口調もて、面白く説き立つるに
筆執れば、九山八海石、夜泊石、赤松石、畠山石などの奇石
點々と池中に浮ぶ。少し右手に秀靈なる山の見ゆるは、衣笠
山なり。
閣を下りて北手に岩下水、龍門瀧、鯉魚石の勝あり。そを左
にして小阪路攀れば池あり、地域に比すれば大なり、白蛇
池又は安民澤と云ふ。其由緒はと小僧に詰れども、轉經と同
一の案内なれば、固より知る筈はなく、幾度か圓き頭を搔か

◎時序

説明の要
説きあかさ必
要。

抹茶
ひき茶。うす
茶。

渴を醫し
かわきをなほ
すを云ふ。

課役
工事を割り當
つるこころ。

んとして撫でなほすは、味噌摺る日敷の浅き證據と知られぬ
夕佳亭は、池の左にして小丘の上に建つ。萩の遠棚に南天の
床柱、説明の要も有るまじ。觀覽既に終りて茶寮に入り、一
椀の抹茶に渴を醫し、送られて寺を出づれば、前に吾を迎へ
し門は左、扉すでに閉されて金閣のみ樹梢に聳ゆ。

二條 離宮

此處、堀川以西、二條南北の地を占め、東西五町餘、南北四
町餘、もとの二條城とす、城壁整然として深濠相遶り、正門
は東面す。本丸二の丸の二區に分ち、殿閣其中に聳む古松は
並び立ちて之を護す。慶長五年、徳川家康戦捷の後、關西の
諸侯に課役して築けるもの、天守閣は其後焼亡し、他の殿舎

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

三百二十一

◎時序

武威云云
兵力にて天下
を制せしを云
ふ。

大政
天下の政事。

擴大
おしひろめて
大にせること
擴張。

豪戸云云
金満家に費用
を負担せしめ
て。

焚滅
焼けて無くな
ること。

禁裡
いしよ。内裏。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花香月影)

三百二十一

は時々修理を経て今に存す。もと家康、秀忠、家光三代の駐所に充てられ、言ふも愚なれども當時は實に武威海内を壓せるなりき。降つて慶應三年、慶喜こゝに居り、つらく時勢に見る所あり、遂に大政返上の奏請をなしぬ。此處、實に明治中興の運を開きたる歴史を有するなり。維新の際、此に大政官代を置き、又京都府の廳舎となりしことあり、今は離宮とせられ、桂離宮と共に大に修理を加へられ、御溝の春水も御所内の青松も、長くもめでたき色をば添へぬ。

附記す。織田時代の二條城は、舊の武衛陣第を擴大したるにて、一に二條春日第とも稱し、其跡は上京區武衛陣町、此地二條大路に接近せず。而して二條と云ふ其故を

知らず。永祿十二年織田信長、將軍義昭を奉じて入洛し畿内の豪戸に課して幕府を修む。此時、武衛陣址を拓き府第を築き、以て義昭を此に居らしめぬ。則ち此に謂ふ二條城なり。同十年六月二日の夜、本能寺の變に際し、子の信忠難に赴くに及ばずして、賊兵のために攻められ一城焚滅せるなりき。

神 泉 苑

往昔の禁裡に建てられしと云ふ聚樂第、當時は豊公の豪華を擧りて此に鍾めしも、春風吹き老いて今は片影を留めず、日暮御門と云へりしは、其壯麗華美なる見る者、日の暮る、を忘る、よりの號と傳ふるも、遺蹟を探らん

(春)

○花の旅 (京都の花香月影)

三百二十三

◎時序

現今
今云ふに同
じ。現時。

祈雨
あまこひ。

膾炙す
人の口には
上ること喧傳
するを云ふ。

封境
境域の義。

奠都
みやこを定む
ること。奠鼎。

至尊
天子を申し奉
る。

一握の土
すこしの地。

噴々
口々に言ひた
つるさま。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百二十五

路に至り、西は壬生通を限り、東は大宮大路に達せるなりとぞ。此苑は、桓武天皇延暦免都の際に設けられし所にして、爾後、至尊御遊の仙境たり。近衛次將を別當となして之を衛らしめ、其正殿を乾臨閣と稱し、巨勢金岡石を疊むと稱す。のち年経るま、に漸く荒れ、元和の頃に至りては、舊址殆ど堙滅せんとしたりしを、僧覺雅なるもの官に請ひ、其一部を修補し、眞言の一寺を建立し、以て今日に至れりとぞ。蓋し苑は、平安京當時の遺蹟なるにより、荒廢破殘せる一握の土にも尙、噴々として世に喧傳せらる。前項に記せる池中に三島あり、一は善女龍王を祭り、一は二重塔を築き、一は辨天祠を鎮せり。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百二十四

には今日も亦暮るべし、とて其跡を訪はで、今し來けるが此處、神泉苑、地は御池通り大宮西へ入る門前町ぞ。現今の地域は、僅かに東西三十五間、南北四十六間、東寺所管の一寺あり。門内に池あり、春水渚を洗ふ、これぞ法成就池なり。往時、小野小町此苑にて、祈雨の和歌を詠じたるは最も人口に膾炙す。弘法大師も亦此に、天竺無熱地の善雨龍王を勸請して雨を禱り、或は鷺の宣旨を蒙りて、岸上に羽翼を斂めし爲に、五位の榮爵を賜り、鶉の天覽に際して水底に劍を含み、鶉丸の寶器を得せしめたるも、すべて此苑の出來事ぞ。古の封境は甚だ廣く、北は二條大路を界とし、南は三條大

◎時序

著名
名高きこと。

探勝
名勝を尋ねまはるること。

奥義、秘訣
其道のおくそこのおくのて蘊奥。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百二十六

六角堂。池の坊

堂の形の六角なるによりて著名に、天台宗にして頂法寺と號す。本尊は如意輪觀世音、一寸八分の黄金佛にして、淡路の岩屋浦の海中より出現の靈佛と傳ふ。今日も亦處々の探勝に遅々たる春の一日を暮し、之を六角通り烏丸の東に詣でぬ。池の坊は寺内に在り、插花池の坊の家元として名高し。往時此坊の住僧專慶、いたくも活花の技を愛し、常に深山幽谷、又は野邊に歩を運び、草木自然の趣を探り、大に其奥義を發明する所あり、以後代々其秘訣を傳へ、以て今日に至れり。

川と橋

嵐山の花影を映す大堰川は既に記したれど、清き加茂川

追記云云
後より記するも面白からずとなり。

紫電輝く燈
電氣燈を云ふ

多少
幾分か。いくらか。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百二十七

堀川。戻橋

高瀬川、堀川、疏水運河はまだなり。今朝より訪ひ漏したるもの、追記も興なし。今宵は以上の川と橋の事ども書かんと、紫電輝く燈の下に先づ西なる堀川に、腕だめしにと筆執る。

溝にも等しき小さき堀川、ゆく／＼汚水を送りて東寺の傍を過ぎ、紀伊郡上鳥羽に至りて加茂川に注ぐ。あはれ小さき此川、注意を拂はずは無意味のものに終らんも、多少の歴史は今の汚水にも響きて流るべし。桓武遷都の當時、大内裡の東西に開鑿せられし濠渠の一にして、水源に二あり。一は愛宕郡の鷹ヶ峰に發し、東紫竹大門村を流れ。若狹川との名を

◎時序

會し
出會ふこと。

利用
彼をこれに役
に立たす
こと。應用。

報を
知らせを

蘇生
よみがへり。

(春) ○花の旅 (京都の花月影) 三百二十八

得。一は加茂川の支流にして、上流を小川と呼ぶ。此二水
一條戻橋の下に會し、初めて堀川との稱あり。近年、琵琶湖
疏水の支線を引き、小川の北端に注がしめ、水力を利用して
車をかけ、西陣機業の便に供すとぞ。

一條戻橋は、一條通の堀川に架す、京都著名の一橋ぞ。た伽
嘶めきし事なるが、往古三好清行病に罹りしとき、其子淨藏
熊野に在りき。病氣の報を得て京に入るや、父既に死して此
橋上にて葬送に會ふ。淨藏乃ち靈柩を橋上に留め、専心念持
せしに、清行忽ち蘇生し共に其家に歸れり。故に戻橋との名
ありと。
又、一説あり、阿倍晴明かつて橋下に十二神將を鎮し、事に

◎時序

トせんご
うらなはんご

途次
みちすがら。
途上。途中。

舊慣
ふるきならば

平行
相並びての義

臨みて之を役しぬ。故に人自ら事の吉凶をトせんごとする時
橋畔に立ちて行人を窺へば、神將必ず之に託して其吉凶を
示すと。現今、婚姻の途次、もごりの語を忌みて此橋を渡る
を避け、旅行の人を送るに此に於てするは、もごりの語を嘉
すればなり。何處にも同じき舊慣、をかしからずや。

高瀬川。三條小橋。四條小橋

高瀬の曳船とて名高き此處、吾が宿れる樓下に流る、運河こ
そは是。中世内裡修築のとき、其石材を運搬せんがため、角
倉了以が開鑿に係る。もと加茂川の一派、二條橋下より西方
に入り、僅かに一町を隔て、加茂川と平行して南流す。其三
條と四條との東側は、木屋町とて名ある旗亭多く、裏は則ち

(春) ○花の旅 (京都の花月影) 三百二十九

◎時序

狹斜
いろまち。花
街。

行るには
進むるには。

沂る
下流より上流
に上るを云ふ

水源
みなもご。

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

三百三十

加茂の清流、少し下手の裏は先斗町とて狹斜の一區、其西側にも亦酒樓旅舎多く、三條小橋と四條小橋の邊殊に繁華の中心ごも云ふべし。

六條邊よりは本流と漸く遠ざかり、紀伊郡東竹田に至りて再び合し、又分れて伏見町の西を過ぎて淀川に注ぐ。此川、水底淺くして清く、且つ流れ急なり。舟を行るには棹を用ゐがたく、沂るには數人の舟子繩を船體にかけて引く。これを世に高瀬の曳船と稱し、伏水よりして京都に物を運ぶなり。

疏水運河

水源、琵琶湖、大津市の東北、三保崎に設けらる。それより三井寺の麓を繞り、長等山には一千三百餘間の隧道を穿ち、

開鑿

さきりひらくい

横斷

よこぎらうこぎ

支線

わかれのすぢ

給水源

水を供給する
おほもご。

◎時序

(春) ○花の 旅 (京都の花月影)

三百三十一

山科村に至りて御陵山を穿つこと七十間、日岡山に達して又粟田山を四百七十間開鑿し、南禪寺の南、粟田口蹴上に於て幹支の二線に分岐し、幹線は此に傾斜を成し、以て水壓動力を起し、京都市街に供する各種電力の供給所たり。而して南禪寺の前を過ぎ、西折して白川を横斷し、丸太橋の南に至り、加茂川の新運河に入る。支線は北して南禪寺の後より山に沿ひ、如意嶽、神樂岡を遠り、漸く西して高野、加茂二川の底を横り、堀川の上流なる小川に出で、市内の給水源となる。此川によりて京都、大津間の運漕二百餘艘、荷船客船を備へ、電氣力により傾斜を自由に上下せしむ。水口より此に至るまで、延長約四里半。

◎時序

開門
水門のこと。
ひのくち。

紺碧
紺色がかりて
あなきこと。

覺知
それこそ
知るこころ。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百三十二

剩水は更に加茂川に沿うて南下し、伏水町に通ずる新運河となる。又、線路中處々に開門、舟溜所などあり。京都市近傍に於ては加茂川口及び日岡山の舟溜所を以て最大なるものす。其湛ふる水は碧紺にして潭の如く、夏の如きは乗船して水路を周遊し、納涼するもの多しと云ふ。
抑も此工事の發端は明治十四年二月、時の府知事北垣國道の赴任するや、都下の狀況日を逐うて衰微に赴くは、全く水利に乏しくして、運漕の不便に基づくものと覺知し、遂に猪苗代湖の疏水を視察し、巧の必成を期し、爰に初めて計畫起工の事に決し、明治十八年八月之が起工式を擧げ、年を経ること九年にして全く成就せり、其費額二百三十九萬圓なり。洵

欠

欠

偉大
すぐれて大なること。

天を蔽
そらな遮るること。天なかくすこと。

幽齋
藤孝の號なり

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百三十七

燈籠は、佐久間大膳亮勝之の寄進、高さ二丈餘、徑一丈一尺、其偉大なる山門と相適ふ。當山は、臨濟宗の本山なり。門を入れば地いよ、幽に、亭々たる長松、磊々たる喬木、枝さし交して天を蔽ひ、幾多の堂塔並び建つ。右すれば山腹に龜山院の御廟あり、眞の御陵は、龜山殿法華堂とて嵯峨村大字天龍寺の後嵯峨天皇御陵内に在れば、此處のは御分骨處なるべし。南すれば天授庵にして、無關和尚の塔あり。歸雲院は第二世祖圓和尚の塔所なり。金地院には、東照宮の廟所あり。其他子院ありて、韋駄天を祀るもの、摩利支天を本尊とするもの有り。境内には、細川幽齋の墓あり、詣で、苔の塵を掃ひぬ。東に進みて駒瀧を得たり、老樹の陰に咲く櫻の

◎時序
力盡きてか
花の生氣なく
なりてか。

山莊
山中に在りし
しもやしき。

尋で
間もなく。續
きて。

石階
石段のこと。

深樹
ふかき木立。

絶景
すぐれたるけ
しき。

坐に
何故さもなく
わけもなく。

雪寒む云云
落花の形容。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影) 三百三十八
一片二片、力盡きてか瀧の響きに霏々と散る、瀧の名の駒の
勇めばか、なかくに憐れぞ深し。

永 観 堂

南禪寺の北に隣れるが永観堂、浄土宗西山派の一本山にして
聖聚來迎山禪林寺と號し、本尊は見返阿彌陀と稱して名高し
寺地は藤原關雄の山莊なりしを、清和天皇の御宇眞紹僧都
請うて佛刹とし、尋で 天皇の勅願所となる。中興の祖は
行道律師と云ふ。祖師堂石階の下に一株の老楓あり。春の青
葉目も清し、名づけて岩垣楓と云ふ。古今集に、吾宿の岩垣
楓散りぬべし云云とある。關雄の和歌に出でたるもの乎。但
し又、その頃ありしを詠せるもの乎。吾は知らず。

門を入りて右すれば蓮池あり。將に本堂に登らんとする處と
す。池は深樹を透らし、波心に其影をうつす。中にも櫻と楓
と多く、時節柄とて茶店は例の如く棚を連ぬ。今日しも花半
ば散りたれば雑沓すなく、却つて眺め幽なり。若し秋はと
問はゞ、春にましての絶景なるべく。人をして坐に白雲紅葉
の節を想はしむ。

若 王 寺 社

境内には梅、櫻、杜鵑花、楓などに富み、四時の眺めに宜し
き此處、山腹を占めて永観堂の北に在り。さすがに名ある所
とて、花殊に多くして微風に飛ぶさま面白く、顔を撲つも雪
寒からず、鬢を掠めては芳し。溪谷には三條の飛泉あり、十

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百三十九

◎時序

三伏云云
盛夏の熱を逃
れ来るによき
地なりと云ふ
この義。

荒廢甚しく
荒れすたる
事がひどしと
云ふこと。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十

一面瀧、千手瀧、如意輪瀧是なり、所謂若王寺の瀧、地は幽
邃にして樹は密、三伏の避暑に宜しとぞ。

本社は初め正東山若王寺と號し、後白河法皇の御草創、天台
宗にして修驗道を兼修し、聖護院に屬しぬ。當時 法皇熊野
の神靈を勸請し、權現の若宮女一王子の神名に因み、寺に若
王寺と命名せらる。其殿宇廻廊樓門等輪奐の美を盡せしも、
應仁亂後荒廢甚しく、維新後改めて神社とし、若王寺社と
せられしも、當年のものは數字の小祠を餘すのみ。

若王寺社に續きて光雲寺、北三四町に鹿ヶ谷、其麓には
堯然上人の母靈鑑尼公の開基居住せる靈鑑寺、其上方に
は安樂寺あり、後鳥羽院の寵姫松蟲鈴蟲の二女遁れて尼

人間

此世のこゝ塵
實。

山莊

山中に在る別
莊。

密會

人知れず會合
すること。

奇觀

珍らしき見も
の。

◎時序

(春)

○花の旅 (京都の花月影)

三百四十一

となれる遺蹟、相接したる萬無寺は、法然上人草庵の舊
蹟。此邊地境幽靜、樹深く花稀に、一鳥啼かずして殆ど
人間にあらず。

談合谷は、鹿ヶ谷の三四町奥なり、俊寛僧都山莊の舊蹟
治承年間、新大納言成親、判官康頼、俊寛等平氏を倒さ
んと謀りて、鹿ヶ谷の山莊に密會せしこと諸書に見ゆ。
如意嶽は、上方に聳ゆる山、七月十六日、山上に大の字
形の火を點す、故に大の字山と俗稱す。冬は又、點火せ
る跡の凹に雪降りて奇觀を成す、之を雪の大の字山とも
云ふ。以上は、何れも探り漏し、銀閣寺へと急ぎぬ。寺
は鹿ヶ谷よりすれば、正北に當る。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十二

銀閣寺

新築云々
新規に邸宅を造ることをいふ。

精舎
寺院を云ふ。

築庭の法
庭を造る法則

模範
手本のことをいふ。

嗜好
このみ。

頃(ころ)は文明十五年の事なりとかや、足利義政(あしかがよしまさ)に新築(しんてい)を起(おこ)して世(よ)を通(とお)る。時(とき)の天子(てんし)勅(しつ)して東山殿(とうざんてん)の號(ごう)を賜(たま)ふ。その歿(はつ)せんとするに當(あた)り、遺言(いごん)して精舎(しやうじや)となさしむ。則(すなは)ち法號(ほふごう)に因(ちな)み慈照寺(じせうじ)と名(な)を命(めい)ず。開基(かいき)は夢想國師(むさうこくし)。襖(ふすま)、障子(しやうじ)の繪(ゑ)など皆名匠(みなめいしやう)の手に成(な)れり。其庭園(そのていゑん)は、茶道家(さだうか)相阿彌(さうあみ)の經營(けいゐい)に係(か)り、一株(いちく)の樹(じゆ)も、一片(いっぺん)の石(いし)も築庭(ちくてい)の法(ほふ)に漏(も)る、ことなく、四季(しき)の壯觀(さうくわん)備(そな)はらざるはなし。今日(けふ)しも花(はな)五六分(ぶぶん)散(ち)りたれど、山鶯(さんおう)處(ところ)々に鳴(な)き、春樹(しゆんじゆ)の若綠(わかろく)ながめ清(きよ)く、さすがに床(ゆか)し。後世(こうせ)に築庭(ちくてい)の模範(もはん)とする、理(り)の當然(たうぜん)と謂(い)ふべし。茶室(ちやしつ)は東求堂(とうきうだう)の東(ひがし)に在(あ)り、義政(よしまさ)の嗜好(しやうかう)に成(な)れるもの、茶家(さか)こ

◎時序

濫觴
はじまり。おこり。

露盤
塔(た)の心(こゝろ)をなす柱(はしら)上(うへ)に高く突出(とつしゆつ)せるもの

明媚
山水(さんすい)清(きよ)くして景色(けしき)のおもむき多(おほ)きこと。

れを四疊半敷茶室(よへはんぢうさ)の濫觴(らんしやう)とす。例(れい)の名高き銀閣(ぎんかく)は、東求堂(とうきうだう)斜(な)に相對(あひたい)したる二層閣(にそうかく)、上(かみ)を心宮殿(しんぐうでん)と云(い)ひ三間四方(さんけんしやう)、下(した)を潮音閣(しやういんかく)と云(い)ひ東西四間(とうざいしよんかん)、南北三間半(なんぼくさんかんはん)、屋宇(おくう)は寶塔形(ほうたけい)をなし、露盤(ろばん)に銅鳳凰(どうほうわう)を置(お)く。此閣(このかく)よ、北山(きたやま)の金閣(きんかく)に對(たい)して起(おこ)せるもの其銀箔(そのぎんぱく)を鏤(ら)めざるは、未(いま)だ工(こう)を竣(すま)らざるに先(まづ)ち、義政(よしまさ)の薨去(こうきよ)したるに因(よ)るも、其趣向(そのしゆかう)によりて命名(めいめい)したるものごぞ。かへす、山水(さんすい)の明媚(めいめい)なる、池(いけ)といはず、石(いし)といはず、樹(じゆ)といはず、天下(てんか)の勝(しょう)を一庭(いつてい)に集(あつ)めたる心地(こころち)ぞする。

吉田神社

奈良京(ならきやう)の昔(むかし)は、春日社(かすがじや)を以(もつ)て氏社(うぢやしろ)とし、興福寺(こうふくじ)を以(もつ)て氏寺(うぢでら)とす。平安城(へいあんじやう)の今(いま)は、吉田社(よしたじや)を以(もつ)て氏社(うぢやしろ)とし、法成寺(ほふじやうじ)を以(もつ)て氏寺(うぢでら)とす。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十三

藤門
藤原氏の二門

社殿は偉麗
社の殿宇がす
ぐれて立派な
るこそ。

碧苔に
あをこけ。青
苔。

延暦帝
桓武天皇を申
し奉る。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十四

寺とす。社頭の興廢に従ひて、藤門の盛衰を測るべし云云と
宣胤卿の記に見ゆるは此社、二十二社の一にして現に官幣大
社、銀閣寺の西方、神樂岡の麓に鎮座す。貞觀三年中納言藤
原山陰創建、祭神は武甕槌命、經津主命、天兒屋根命、比賣
大神、社殿は偉麗にして境域は廣大なり。附近の社寺は、花
と紅葉に名高く、此處は初夏の躑躅に勝を占め、今來し吾に
も滿地火の如く、碧苔色を變ずるに至るべしと想はしめぬ。
此邊は吉田の里なりしかば、今は吉田町と稱せられ、神樂岡
は俗に吉田山とも云ひ、頂上の眺め凡ならず。春は殊に筆に
しがたき景よ。むかしは 延暦帝の御幸あらせられたる地。

眞如堂

開基
寺院の創立者
寺院の祖。開
山。

曾て云云
全く世の煩ひ
を絶つこの義

醉ふに云云
酒酌むには不
足なき春げし
き。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十五

眞如堂とは、鈴聲 山眞正極樂寺の本堂の名、之を神樂岡の東
南なる中山に訪ひたり。天台宗の一寺院、戒算上人の開基に
して、本尊は阿彌陀佛、慈覺大師の作とぞ。もと白河女院の
離宮なりしを、請うて佛寺となしたるものなり。境内には本
堂はじめ、元三大師堂、善光寺如來堂、方丈、經藏。藥師堂
鐘樓、稻荷社など處々に散在し、地域最も幽靜、曾て紅塵飛
來せず、古來紅葉の名所なれども、鎮守の稻荷社前には櫻樹
多く、芹舎が十七字詩に、
よきもの、餅屋は淋し花の時
と歌ひし如く、酒なくては濟されぬ此處、花半ば散りし今日
なればとて、醉ふには餘りある春色、路にてそと買ひ求めし

封切る
封じ目を解く
くちを開く。

◎時序

始祖
ぐわんそを云
ふ。

嵐氣
山の氣のこま

叡山
延曆寺を云ふ

鐘堂
かれつき堂。
鐘樓。

無常を觀じ
人世のほかな
きを達觀して
その義なり

異香
奇しきかなり

中興
中ごろに興す
こと。

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)
小さき正宗の瓶、初めて花下にて封切る。

三百四十六

黒谷

此に紫雲山金戒光明寺と云ふがあり、浄土宗鎮西派四個本山の一、始祖法然上人居住の舊蹟、叡山西塔の黒谷に模りたるに因り、新黒谷と呼びしも、中世に至り新の字を省き、單に黒谷と稱す。安元々々年本寺草創の時は、白川禪房と云ひしを、後宇多天皇今の號を賜ひしとぞ。寺境たる、すべて自然の山林を占め、老樹深くして春雲こまやかに、碧苔厚うして嵐氣うるほひ、歩々幽谷に入るのたもひす。其叡山に模りしと云ふもの、徒らに黒谷に擬せんとするの意に出でし非ざるを知られぬ。

處々には本堂を筆頭に、彼方に阿彌陀堂、鐘堂、經藏を望めば、此方には觀音堂、勢至堂、熊谷堂、三重塔など見ゆ。鐘掛松は本堂の庭前に在り、熊谷直實一の谷の合戦後、人の世の無常を觀じ、來りて法然上人の徒弟となりし時、其鐘を掛けし名殘の松樹、紫雲石は塔の北一町許の處に在り、むかし法然上人この石上に踞して念誦せるとき、紫雲低れて四邊を圍み、異香薫じたりと云ふ舊蹟。

聖護院

智證大師の開基、當時常光院と號せしが、寛治のむかし江州三井寺聖護院の増譽僧正これを中興してより、今の院號に改む、世々法親王の住職する所にして、三井門主の隨一たり。

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十七

修驗道 役の小角の開きし一種の教法。

◎時序

焼亡

焼けてなくなりしこと。

微に云云

些細の物になるまでこの義

輪奐の美

建物の宏壯美麗なること。

紀念

かたみ。

延暦

年號の名。

遺蹟

舊蹟。古跡。

高風

けだかき風采

◎時序

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十八

中興の祖増譽僧正は三井寺の長吏、且つ熊野三山の別當たりしより、當院も亦修驗道を兼ね、山伏を司管するに至れり。因に記す、山伏に天台眞言の二流あり、天台派のものは當院に、眞言派のものは三寶院に屬すとぞ。所在地は聖護院町。附記す、熊野社は附近にして同町に在り、應仁の亂に焼亡し、爾後再興せられて今日に至るも、社殿は往昔の十が一にも及ばすと云ふ。當社は後白河上皇の勅願により熊野新宮を祀る所、創建當時、本山の土砂、樹木、石の微に至るまで、悉く之を熊野より移し、殿舎は金銀珠玉を鏤め、樓門、僧堂、廻廊、經藏等一として備はらざるなく、輪奐の美を盡せしとぞ。訪はざりき。

詩 仙 堂

明治二十八年、平安帝遷都一千百年祭の紀念として建設したる大極殿には、そる延暦の昔をしのび、官幣大社平安神宮をも拜し、愛宕郡に入りては百萬遍、此は淨土宗鎮西派四ヶ本山の一、其西北に干菜寺、將軍地藏、北山御坊、金福寺の芭蕉庵等、路の都合により、横目に見て過ぎしもあり、訪はぬもあり、今來しは天王社の側なる詩仙堂、地は修學院村大字一乗寺なり。

石川丈山の遺蹟として世に知られたる此堂、結構固より見るに足らねど、丈山の高風を慕ふもの常に相訪ふ所、堂中には遺品の外、楣間には本朝の三十六歌仙に擬し、漢魏唐宋三十

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百四十九

◎時序

詩仙
普通人の及ぶ
べからざる天
才ある詩人

未曾有の例
昔より一度も
なかりしため

遺世の感
浮世を忘るゝ
感じ

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百五十

六詩仙の畫像を掛け、題するに各一詩を以てす、書は丈山、
畫は探幽なり。丈山は寛文十二年歿す、歳九十なりと云ふ。
享保年中、靈元上皇一たび此に臨幸し給へり、實に未曾有の
例。貴しや小々の區、修竹叢をして、紅塵到らず、しかも艶
麗なる花を謝し、地まで他の諸名勝と其撰を異にす、うた、
丈山の人となりを偲ばしめ、清風明月を延くのみならず、亦
詩にあこがる、余の入るを拒まず、殆ど遺世の感ぞする。

附記す、尙進みて修學院離宮をも訪ひたかりしも、他に
漏したる所と共に、秋の旅に譲らんとて歩を返しぬ。

上加茂、下加茂兩神社

加茂、高野の二流相合する所、春樹烟れるを糺の森と云

霽ぐ棚云云
賣る棧敷をか
くるさのこ
なりさの義

樓門
二階造の門

廻廊
まはり廊下

結構の宏壯
構へ方のリッ
ばなること

復興
再興と云ふに
同じ

◎時序

ひ、一に河合森と稱す。水邊は乃ち糺川原、此處には別
に御手濯川の一水、加茂の社頭より木蔭を流れて來るが
あり、夏は酒茶を霽ぐ棚を架すとぞ。

賀茂御祖神社は即ち下加茂神社、社格は官幣大社、祭神は多
々須依毘賣命、大山咋命、白鳳四年の創建に係り、樓門あり
中門あり、廻廊あり、拜殿、正殿、橋殿、細殿、雷殿の外に
攝社、末社すべての殿舎を算すれば數十棟なり。その結構の
宏壯なる界限に比なく、樹木の森々たるにも神威の高きを知
られ、處々に點綴する花散りて、青苔には玉を鏤むるが如き
言ひ知らぬ趣あり。本社例祭は、葵祭とて名高く、欽明帝
の御宇に創り、維新後中絶せるも後更に復興して今日に至れ

(春) ○花の旅 (京都の花月影)

三百五十一